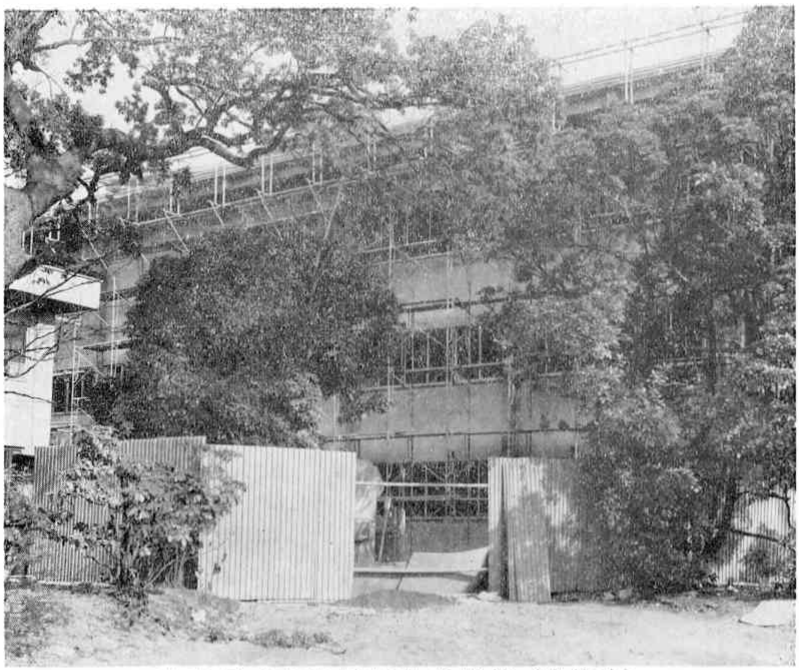
東京国立文化財研究所要覧

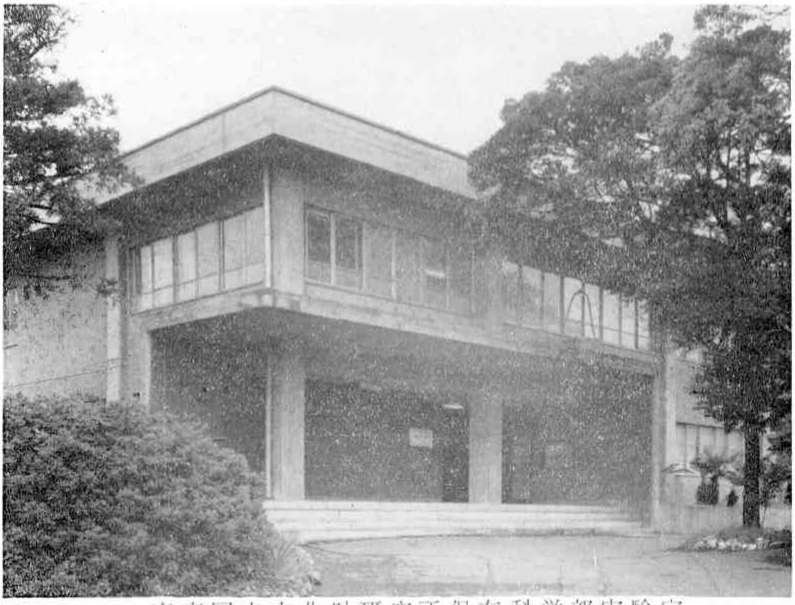
1968—1969

昭和43年度—昭和44年度

東京国立文化財研究所本館

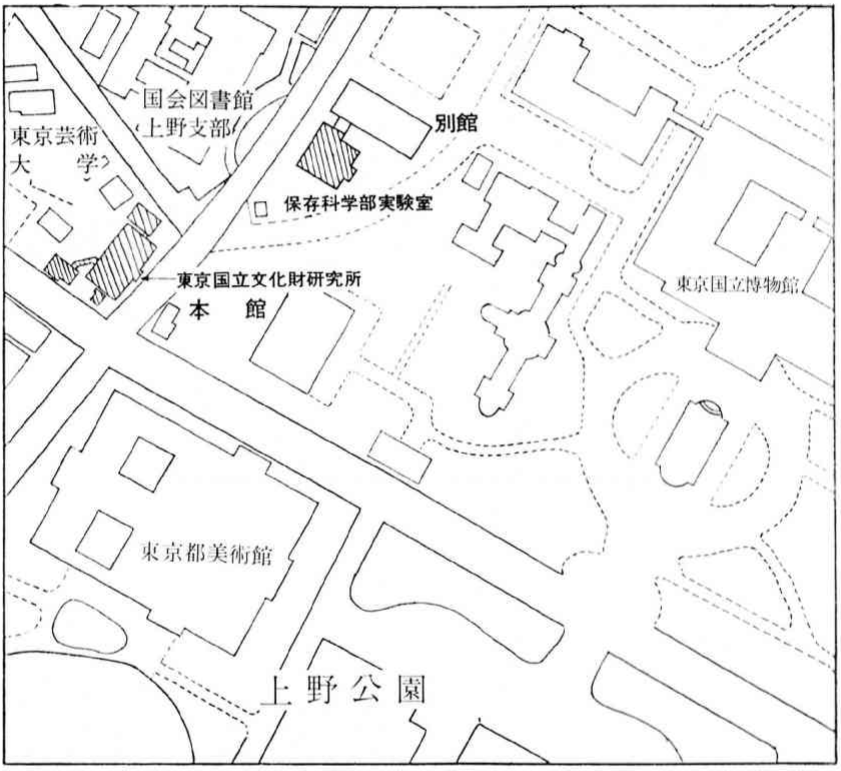


東京国立文化財研究所別館（建築中）



東京国立文化財研究所保存科学部実験室

東京国立文化財研究所建物所在図



目　　次

Ⅰ　沿　　革 …… 1

1　設立の経緯 …… 1
2　年　　表 …… 1
3　歴代所長 …… 4

Ⅱ　設立目的と機構 …… 5

1　機　　構 …… 5
2　職種別予算定員 …… 6

Ⅲ　土地・建物 …… 7

1　敷地・建物の面積・構造一覧 …… 7
2　建物の平面図 …… 8

Ⅳ　予　　算 …… 10

1　歳出予算 …… 10
2　科学研究費補助金交付決定額 …… 10

Ⅴ　研究活動及び事業 …… 12

1　研究活動 …… 12
(1)　美術部 …… 12
A　研究・調査活動の概要 …… 13
B　研究題目 …… 14
C　研究・調査活動 …… 22
D　主要研究業績 …… 30
E　科学研究費題目 …… 36

(2) 芸 能 部……36
A 研究・調査活動の概要……37
B 研 究 題 目……38
C 研究・調査活動……41
D 主要研究業績……44
E 科学研究費題目……47
(3) 保存科学部……47
A 研究・調査活動の概要……48
B 研 究 題 目……50
C 研究・調査活動……55
D 主要研究業績……60
E 科学研究費題目……62
F 受 託 研 究……63
2 事 業……67
(1) 出 版……67
A 美 術 研 究……67
B 日本美術年鑑……69
C 保 存 科 学……69
D その他の出版物……70
(2) 公開学術講座……72
(3) 開所記念日行事……75
(4) 国際国内関係……75

VI 研究施設・設備……78

1 蔵 書……78
2 資 料……78
3 機 器 ・ 設 備……79
4 黒 田 記 念 室……82
5 閲 覧 室……84

Ⅶ 職　　員 ……85
1 現　職　員……85
2 旧　職　員……87
Ⅷ 関係法規 ……90

I 沿　　革

1 設立の経緯

本研究所は，昭和27年4月1日発足したのであるが，その前身であり母胎となったものは，昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は，大正13年7月，故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は，故子爵の遺志にしたがってこの資金で行なうべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鐐二郎および東京美術学校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し，またわが国美術上の必要に照らして次の事業を行なうこととした。

(1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。

(2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。

(3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。

(4) 事業成立のうえは一切これを政府に寄附すること。

2 年　　表

昭和元年12月　前記の事業を遂行するため委員会が設置され，東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し，美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄，黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二および大給近清，建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎，会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月　美術研究所準備事業を開始した。

同年10月　東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造，半地階2階建，延面積1,192m²の建物1棟を起工した。

同3年9月　前記の建物が竣工したので，美術研究所開設のため必要な備品・図書・

写真等の研究資料を設備し，また館内に黒田子爵記念室を設け，同子爵の作品を陳列した。

同4年5月　遺言執行人代表者樺山愛輔は，建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同5年6月28日　勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ，東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同年10月17日　美術研究所開所式を挙行した。

同7年1月　美術研究所の研究成果発表機関誌として，定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年4月18日　株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5ケ年間毎年5千円，合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同年5月26日　帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け，美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行なうことになった。

同9年10月18日　毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日　鉄筋コンクリート造，2階建，延面積129m²の書庫が竣工した。

同年4月　「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同年6月1日　勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し，閲覧事務を開始した。

同12年6月24日　勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され，従来，帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同年11月29日　美術研究所長職務規程，美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日　木造，平家建，延面積97 m²の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日　黒田清輝の作品，ならびに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。、

同20年5月28日　美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同年7月～8月　酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため，さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日　酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同年4月4日　酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同年4月16日　東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品ならびに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月3日　美術研究所官制が廃止され，国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

同24年　本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日　文化財保護法の制定に伴い，美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同26年1月31日　美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。（昭和25年8月29日から適用）

同27年4月1日　東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ，美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ，美術研究所組織規程が廃止された。

同年7月1日　芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し，研究を開始した。

同28年4月26日　保存科学部研究室は，国立博物館保存修理課保存技術研究室として昭和22年発足以来，東京国立博物館地階の1室に置かれていたが，同館構内の倉庫132m²を改造のうえ移転した。

同29年7月1日　東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第1号），東京国立文化財研究所となった。

同32年3月28日　東京国立博物館構内に木造，外部鉄網モルタル塗，平家建，8m²の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同年11月30日　従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし，増築分延面積71m²が竣工した。

同34年4月30日　国立文化財研究所研究受託規程（文化財保護委員会告示第14号）が

定められ，この年度から受託研究が開始された。

同36年9月16日　東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第1号），従来の庶務室は庶務課となった。

同37年3月31日　東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として，鉄筋コンクリート造2階建延面積663 m² の建物1棟が竣工した。

同年7月1日　東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第1号），新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同年7月20日　芸能部研究室は，保存科学部庁舎の竣工に伴ない，旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年6月15日　文部省設置法の一部が改正され（昭和43年法律第99号），本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年8月23日　保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延2,065m²）の起工式が行なわれた。

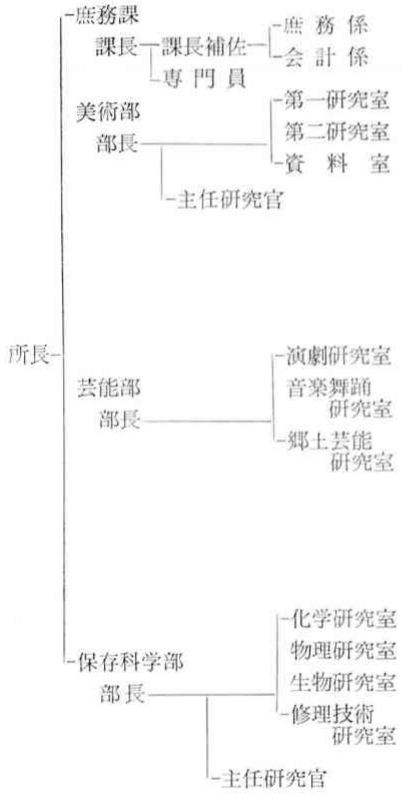
3　歴代所長（昭和5年～昭和44年）

主　事	正木直彦	（昭和 5. 6.28～昭和 6.11.25）
主　事	矢代幸雄	（昭和 6.11.25～昭和10. 6. 1）
所長事務取扱	和田英作	（昭和10. 6. 1～昭和11. 6.22）
所　長	矢代幸雄	（昭和11. 6.22～昭和17. 6.29）
所長事務取扱	田中豊蔵	（昭和17. 6.29～昭和22. 8.16）
所　長	田中豊蔵	（昭和22. 8.16～昭和23. 5.11）
所長代理	福山敏男	（昭和23. 5.11～昭和24. 8.31）
所　長	松本栄一	（昭和24. 8.31～昭和27. 4. 1）
所長事務代理	矢代幸雄	（昭和27. 4. 1～昭和28.11. 1）
所　長	田中一松	（昭和28.11. 1～昭和40. 4. 1）
所　長	関野克	（昭和40. 4. 1～現在）

Ⅱ　設立目的と機構

東京国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行なうことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1　機　　構



（庶　務　課）

職員の人事に関する事務　職員の福利厚生に関する事務　公文書類の接受　公印の管守及び庶務に関すること　経費及び収入の予算　決算その他会計に関する事務　行政財産及び物品の管理に関する事務　庁内の取締り

（美　術　部）

わが国の美術及び西洋美術・東洋美術に関する調査研究及びその結果の公表　黒田記念室に関する事務　美術の研究に関する資料の作成・収集・整理・保管・公表及び閲覧並びに光学的方法による美術の研究

（芸　能　部）

演劇・音楽・舞踊・郷土芸能の保存に関する調査研究及びその結果の公表

（保存科学部）

文化財及びその保存に関する化学的・物理的・生物学的調査研究並びにその結果の公表　文化財の修理に関する科学的・技術的調査研究及びその結果の公表

2　職種別予算定員

区分＼年度	43 年 度	44 年 度
指定職	1	1
所長	1	1
行政職㈠	15	14
課長	1	1
課長補佐	1	1
係長	2	2
専門職	2	2
一般職員	9	8
行政職㈡	2	2
守衛	1	1
自動車運転手	1	1
研究職	31	31
部長等研究員	5	6
室長等研究員	8	7
研究員	17	17
研究補助員	1	1
合計	49	48

Ⅲ　土地・建物

東京都台東区上野公園12番53号の建物を本館とし，同13番9号にある別棟の建物をそれぞれ保存科学部庁舎・芸能部庁舎として使用している。なお，昭和44年度保存科学部庁舎に隣接して別館庁舎（延 2,065 m²）が新営されることとなり，芸能部庁舎は用途廃止され芸能部・保存科学部は別館に移転することになる予定である。

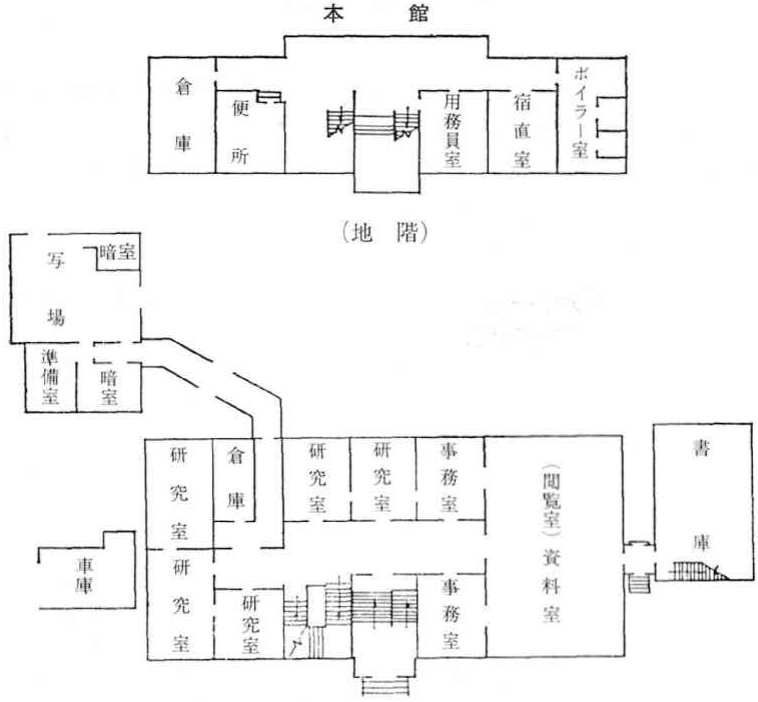
本館は，昭和3年9月に竣工した旧美術研究所の建物で，所長室・庶務課の事務室・美術部の各研究室及び黒田記念室等となっている。本研究所の敷地・建物の面積構造（昭和44年12月現在）等を示すと次のとおりである。

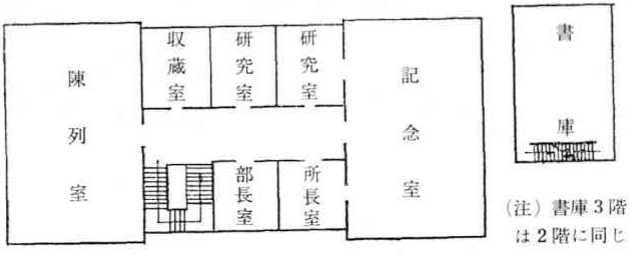
1　敷地・建物の面積・構造一覧

敷地1,457 m²（本館関係のみ他は東博より借用）

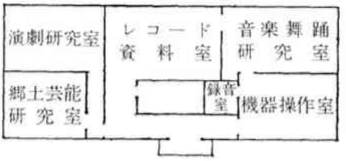
No	名称	種目・構造	建面積 / 延面積	建築年月日	No	名称	種目・構造	建面積 / 延面積	建築年月日
			m²					m²	
1	本館	事務所建 RC. 地上2階・地下1階	468.26 / 1,192.72	昭 3. 8. 30	5	準備室及第2暗室	雑屋建 木造平家	35.12 / 35.12	昭13. 1. 8
2	書庫	倉庫建 RC. 3階	64.63 / 201.80	〃10. 1. 25 (〃32. 11. 30 3階増築)	6	渡廊下	〃	20.26 / 20.26	〃13. 3. 25
3	渡廊下	雑屋建 RC. 平家	4.13 / 4.13	〃10. 1. 25	7	車庫	〃	27.96 / 27.96	〃15. 9. 11
4	写場及第1暗室	雑屋建 木造平家	62.80 / 62.80	〃13. 1. 8	8	保存科学部実験室	事務所建 RC. 2階	338.41 / 663.31	〃37. 3. 28

2　建物の平面図

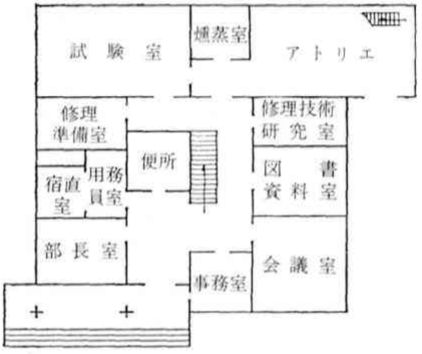

本　館
倉庫
便所
用務員室
宿直室
ボイラー室
（地　階）
写場
暗室
準備室
暗室
研究室
倉庫
研究室
研究室
事務室
（閲覧室）資料室
書庫
車庫
研究室
研究室
事務室
（1　階）


陳列室
収蔵室
研究室
研究室
記念室
部長室
所長室
書庫
（注）書庫3階は2階に同じ
（2　階）

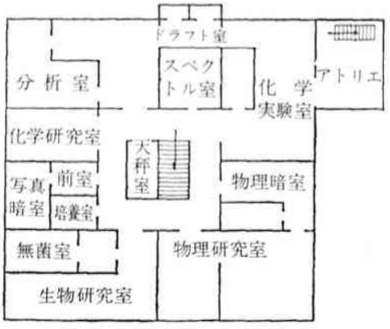
芸能部庁舎



保存科学部実験室



（1　階）



（2　階）

注　各庁舎の縮尺不同

Ⅳ 予　　算

1　歳出予算（43年度～44年度）

区分 / 年度	人件費	事業費	施設整備費	合計
昭和43年度	63,625千円	29,389千円	2,751千円	95,765千円
昭和44年度	70,015	30,648	146,331	246,994

2　科学研究費補助金交付決定額（43年度～44年度）

区分 / 年度	一般研究		奨励研究		総合研究		合計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
昭和43年度	5	千円 1,290	2	千円 200	2	千円 2,200	9	千円 3,690
昭和44年度	3	720	1	100	2	2,500	6	3,320

43年度

（研究題目）	（研究者）	（金額）	（摘要）
乾隆コレクション絵画の復元的研究	川上　涇	730,000円	一般研究C
上杉神社蔵服飾類の調査研究	田実栄子	230,000	〃
尊像別分類による彫刻の研究—主として四天王について—	猪川和子	100,000	一般研究D
十二天絵像の研究	柳沢　孝	130,000	〃
寺院芸能の研究—声明を中心として—	佐藤道子	100,000	〃
奈良平安時代装飾文様の様式史的研究	江上　綏	100,000	奨励研究A
中世蒔絵技法の実証的研究	中里寿克	100,000	〃
平安時代における浄土教美術の総合研究	高田　修	1,100,000	総合研究A
近世初期日本洋風美術の実証的研究	岡　畏三郎	1,100,000	〃

44年度

(研究題目)	(研究者)	(金　額)	(摘　要)
歌舞伎囃子付帳の研究	浦山政雄	500,000円	一般研究C
寺院芸能の研究—声明を中心として—	佐藤道子	100,000	〃　D
竹内久一と明治彫刻	中村伝三郎	120,000	〃　D
考古学資料の不接触精密復製法	石川陸郎	100,000	奨励研究A
平安時代における浄土教美術の総合研究	久野　健	1,250,000	総合研究A
南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究	川上　涇	1,250,000	〃

V　研究活動及び事業

1　研究活動

(1)　美　術　部

美術部は日本・東洋の古美術，日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行ない，その成果を公表するとともに，美術に関する研究資料を作成，収集，整理し，これらの資料を一般研究者の利用にも供し，美術の学術研究のための資料センターの役割も果している。現在3室に分かれ，古美術関係は第一研究室，近代・現代・西洋美術関係は第二研究室，資料関係は資料室が担当する。

調査研究は美術部3室所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが，学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し，方法においても成果においても，基礎的・先駆的役割を果して，広く永く学界に寄与すべく努めている。そのため重要なる問題に関しては共同研究を行ない，また当部独自の光学的・化学的研究法を活用し，すでに多くの成果を収めた。

これら業績は当部の機関誌「美術研究」（昭和7年創刊，年6冊発行）に発表し，大部の成果は随時単行の研究報告書として刊行する。また毎年のわが国美術界全般にわたる動向を調査し，客観的資料の提供を主眼として，「日本美術年鑑」を編纂発行している。

研究資料の収集・作成などに関しては，当部の前身たる美術研究所として発足以来，調査研究とともに力をそそいで来たが，現在それらの資料の蓄積も多く，部外研究者広く海外の研究者のため，あるいは文化財関係の事業等のためにも大きな寄与をしている。作成保有する資料公表の一として，定期的には毎年，日本・東洋古美術ならびに近代・現代・西洋美術に関する雑誌論文および単行図書を分類集録した文献目録を編纂し，「日本美術年鑑」に掲載している。古美術関係文献についてはさらに増補訂正を加えて一定の年次をまとめてすでに数冊刊行したが，今後もこれが継承に努めた

い。

以上のほか，調査研究成果を簡潔に整理した形で公表するため，毎年1回公開学術講座を開催している。

また当部の黒田記念室は，美術研究所設立のため遺産と遺作を寄付した黒田清輝の作品および関係資料を保管しているが，毎週1回一般に公開している。

A　研究・調査活動の概要

○各研究員それぞれ専門領域を中心に調査研究を進めるとともに，主要な問題をとらえ共同研究を実施して来ているが，43年度には第一研究室及び資料室所属研究員の共同によって文部省科学研究費総合研究「平安時代における浄土教美術の総合的研究」（代表者高田美術部長他8名，所外6名）を実施した。浄土教思想と美術，浄土変相及び来迎図の展開と主要遺品の研究，定朝様阿弥陀像の成立とその変遷，大陸に於ける浄土変関係彫刻及び敦煌の浄土変相図の研究の課題のもとにそれぞれ調査研究を行ない，特に富貴寺阿弥陀堂の壁画・板絵の精密な調査をなし，法華寺の阿弥陀三尊などについては光学的方法による詳細な調査の結果，製作年代などに関し更に考究すべき資料も得，また10世紀の主要彫刻を調査し，表現形成の相違や展開について解明するところがあった。

この総合研究は44年度も引き続き行ない，12世紀の代表的作である心蓮社蔵来迎図・伝清海曼荼羅などについて光学的方法により詳細な調査撮影を実施して，それぞれに新たな成果を得，また三千院の阿弥陀像を精査し，従来知られなかった胎内の構造などについて明らかにした。

○43年度にはまた第二研究室を中心とし，文部省科学研究費による総合研究「近世初期日本洋風美術の実証的研究」（代表者岡第二研究室長他8名，他部1名，所外7名）を前年度に引き続き行ない，主要遺品に関する光学的・化学的研究，洋風画に関する文献資料の収集と遺品の詳密調査，明末清初の中国絵画における洋風技法摂取の様態，ヨーロッパ美術との関係等について調査研究を進めた。その結果「婦女弾琴図」等の光学的・化学的研究によつて，一部の顔料などに東南アジア原産のものの使用が明らかとなり，ヨーロッパ美術との関係においては16世紀後半アントワープを中心に作成され，キリスト教布教に用いられた版画がわが国洋風画の源泉をなしている点などに

ついて解明する等大きな成果を得た。

○44年度では資料室及び第一研究室員によって文部省科学研究費総合研究「南北朝を中心とする中世美術の形成過程の研究」（代表者川上資料室長他6名，所外3名）を行なった。土佐派の成立を中心とするやまと絵の動向，宋元画の摂取と漢画の萌起，南北朝における書の変遷，仏像彫刻の変遷，仏師系譜，陶瓷の基礎的整理などの課題のもとに調査研究を進めたが，殊に正木美術館所蔵絵画書蹟・断橋妙倫墨蹟・笠置寺縁起等の調査撮影によって貴重な資料を多く得た。

○第二研究室全員によって，44年度より向う4ケ年計画のもとに，特別研究「日本近代美術の発達に関する明治前期，中期の基礎資料集成」を開始し，新聞・雑誌その他の基礎資料をもとに明治初年から編年的に美術関係の教育・施設・展覧会・研究団体等の調査を行ない資料の収集に努めた。

○資料室を中心とし美術部全員の共同作業に係る特別研究「明治以降日本・東洋美術史学の発達に関する研究」は昭和40年以来行なって来たが，「日本・東洋古美術文献目録」（昭和11～40年）は1200誌に及ぶ定期刊行物の調査，約4万件の採録文献の分類・整理等を完了し，44年3月これを刊行した。本目録は昭和16年刊行した「東洋美術文献目録」に続くもので，学界の久しい要望でもあり，その寄与するところ極めて大といえる。

○第二研究室を中心とする現代美術の動向調査は継続して行なわれ，「日本美術年鑑」としてその集積した年度資料を各年毎に発表した。

○各研究員の調査研究及び2，3名による共同研究等の概要については各自の研究調査活動の項を参照されたい。

○各個ならびに共同の研究成果は美術部刊行の「美術研究」に逐次発表されているほか，学術誌その他の論文，学会における発表等の形で公表され，美術史の研究発達に寄与している。

また調査研究，作成資料などにおいては文化財関係の行政・教育などの面にも協力した。

B 研究題目

高田　　修（美術部長）

〔Ⅰ〕 インド古代中世美術史の研究（43）

〔Ⅱ〕 仏教美術の研究（43）

中　川　千　咲（美術部長）

〔Ⅰ〕 近世工芸意匠に関する研究（43～44）

古九谷・古伊万里を中心とした工芸意匠についての調査研究

〔Ⅱ〕 近代陶芸の調査研究（43～44）

明治大正初頭における陶芸界の動向を中心としての調査研究

〔Ⅲ〕 南北朝陶瓷の基礎的整理（44～）

科学研究費総合研究「南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究」の分担課題として44年度より行なう。

久　野　　健（第一研究室長）

〔Ⅰ〕 平安初期彫刻の調査研究（43～44）

日本各地に分布する平安初期の彫刻を広く精査し，諸遺品の様式的関係と技法，流派等を明確にする。また天平時代の彫刻と平安初期木彫との関係を考察し，平安木彫の誕生について研究する。

〔Ⅱ〕 鎌倉初期彫刻の研究（43～44）

平安初期の仏像の諸遺品を調査し，院政期における新様の発生を明らかにし，これと鎌倉初期の彫刻との関係を考察する。あわせて，運慶様式の誕生について研究する。

〔Ⅲ〕 光学的方法による日本彫刻の調査研究（43～44）

X線γ線等を利用した光学的方法により，わが国の飛鳥時代から鎌倉時代までの古彫刻の内部構造，造像法を検討し，真偽の判定にも役立つような基礎資料を集めることに努めている。

柳　沢　　孝（第一研究室）

〔Ⅰ〕 日本仏教絵画史の展開に関する実証的調査研究（43～44）

平安鎌倉期における仏教絵画遺品，特にその基準的作例について光学的方法

を援用する実証的調査を実施し，その材質技法等の解明，様式的特色の追究を行ない，一方各主題に関する図像学的考察を加え，これらの総合により日本仏教絵画の史的展開を大系づける。

〔Ⅱ〕 白描図像の調査研究（43～44）

密教絵画研究の一環として平安鎌倉時代に描かれた多数の白描図像類を調査し，伝写の系統を明らかにすると共に編年的な整理と考察とを行なう。

〔Ⅲ〕 敦煌請来絹絵に関する編年的研究（43～44）

敦煌請来欧米印所在の絹絵に関し，特に年代の知られる作品を中心として，その編年的考察を行ない，大陸における仏画の展開並びに日本仏画との関連を探求する。

田 村 悦 子（第一研究室）

〔Ⅰ〕 古筆書道の展開の研究

—併せて古筆にかかる国文・国史研究新資料の調査—（43～44）

平安朝の芸術活動の顕著な一面は線によって美を表現した草仮名書道である。これを中心とする古筆書道の研究によって時代精神を発見し，且つその間に，国文・国史学等に有益であり乍らその方面の学者の注意に入らぬ新資料を指摘する。

〔Ⅱ〕 和漢の墨蹟特に遺品稀少なる作者の墨蹟の研究（43～44）

平安以来の書道ようやく平板に陥ろうとするとき主として禅宗にともなって輸入された宋元書道の研究は，日本書道史上一つの転換を取りあげるものであって全書道史中の要枢である。

〔Ⅲ〕 異体字の歴史的変遷のうち奈良時代の異体字の研究（43～44）

漢字には同じ音と意味でも字体の異なっている所謂異体字が少くなく，その時代的変遷は文字学上は勿論書道史上に研究を忘れてはならぬ重要な問題であると共に，実践的の面でも古文書・古文献の釈読に必要不可欠の根柢をなすのである。

猪 川 和 子（第一研究室）

〔Ⅰ〕 平安，鎌倉時代彫刻の調査研究（43～44）

全国各地に分布する平安・鎌倉・南北朝時代の彫刻を調査し，資料の蒐集整理を行ない，時代・作風・作家の系統等を研究する。

〔Ⅱ〕 尊像別分類による彫刻の研究（43～44）

〔Ⅰ〕の研究をさらに展開させ，尊像別にそれらの作例を整理し，諸像の諸相を明らかにし，彫刻における図像的考察を行なう。

〔Ⅲ〕 彫刻作家に関する研究（43～44）

各時代の彫刻作家について，作品及び文献等の資料を蒐集整理し，その系譜を明らかにする。

宮　　次　男（第一研究室）

〔Ⅰ〕 絵巻物の研究（43～44）

絵巻の遺品について網羅的に調査し，その編年的研究を行なうことによって，様式の変遷をあとづけ，時代的・流派的特色を明らかにする。

〔Ⅱ〕 仏教説話図の研究（43～44）

法華経・金光明経および浄土教関係経典所依の説話図について遺品の探索調査を行ない，日本における経絵図相の定着について検討する。

〔Ⅲ〕 肖像画の研究（43～44）

主に似絵・高僧像・頂相を対象とし，影像と似絵の関係，高僧像・羅漢画の時代的特色と様式の変遷，頂相における日本的特質などを検討する。

戸　田　禎　佑（第一研究室）

〔Ⅰ〕 宋元時代人物画の研究（43～44）

主として羅漢十王図の遺品の資料蒐集，整理を行ない，これに体系づけを試みようというもの。

〔Ⅱ〕 南北朝時代道釈画の研究（43～44）

中国宋元仏画と日本の道釈画との関係を基礎資料蒐集に力を注ぎながら行なう。

〔Ⅲ〕 明清画と日本南画の関係の研究（43～44）

江戸時代に舶載された明清画の日本南画に与えた影響を具体的に指摘する。

秋　山　光　和（第一研究室）研究員(非)

〔Ⅰ〕 日本古代中世絵画史の研究

(1) 奈良時代絵画については正倉院収蔵絵画遺品およびボストン美術館所蔵「法華堂根本曼荼羅」の調査と研究を続行。

(2) 平安時代絵画については源氏物語絵巻と源氏絵の系譜，四天王寺等所蔵扇面法華経などに関する調査と研究を続行。

〔Ⅱ〕 中央アジアおよび敦煌絵画の研究

(1) フォッグ美術館所蔵の敦煌壁画断片に関する調査研究。

(2) ギメ美術館所蔵敦煌絹絵，とくに開元銘老僧像の調査研究を続行。

岡　　畏　三　郎（第二研究室長）

〔Ⅰ〕 近世初期洋風美術の実証的研究（42～43，共）

科学研究費総合研究の代表者として参加。

〔Ⅱ〕 明治末より大正期へかけての新絵画運動についての研究（43～44）

フューザン会後の在野団体の運動を主として。

〔Ⅲ〕 明治初期洋画家の伝記資料作品の調査研究（43～44）

前年度より継続中の横山松三郎・山下りんの他，工部美術学校出身画家について。

〔Ⅳ〕 日本近代美術の発達に関する明治前，中期の基礎資料の調査研究（第二研究室全員による特別研究）（44～47）

新聞・雑誌・その他をもとに明治初年から編年的に美術関係教育施設・展覧会・博覧会・研究団体等につき調査を行ない資料を収集する。

関　　千　代（第二研究室）

〔Ⅰ〕 幕末明治初期日本画についての調査研究（43～44）

(1) 皇居杉戸絵とその関連資料についての調査研究―揮毫画家伝記資料並びに造営関係文献の調査

(2)　同期主要画家の伝記資料の調査

〔Ⅱ〕　大正期日本画についての調査研究（43）

(1)　土田麦仙書簡及資料の調査研究

(2)　国画創作関係作家資料の調査

〔Ⅲ〕　現代日本画の動向に関する調査研究（43～44）

(1)　随時開催の日本画展の調査と資料の蒐集

(2)　本年度内物故作家の伝記資料の調査他

〔Ⅳ〕　近世初期日本洋風美術と日本画との関連についての研究（43～44）

坂　本　　満（第二研究室）

〔Ⅰ〕　近世美術における東西交流（43～44）

16・17世紀の日本におけるキリスト教布教に伴なう洋風美術の調査とその源泉としての欧洲美術，とくに銅版画の調査（パリ国立図書館版画部において）およびその整理と研究を継続している。

〔Ⅱ〕　マニエリスムとバロック美術（43～44）

16世紀のマニエリスム中，とくに国際様式の研究（これは〔1〕に関連がある）と建築を中心としてバロック美術の研究を続行。

陰　里　鉄　郎（第二研究室）

〔Ⅰ〕　大正・昭和初期絵画の調査研究（43～44）

万鉄五郎について

〔Ⅱ〕　初期洋風美術の調査研究（43，共）

第１次洋風美術について

〔Ⅲ〕　現代美術の調査研究

川　上　　涇（資料室長）

〔Ⅰ〕　中国絵画史の研究（43～44）

中国絵画史研究の基礎作業として，宋元明清画家の作品および伝記資料の蒐集整理を継続。

〔Ⅱ〕 乾隆コレクション絵画の復元的研究（43，共）

昭和43年度文部省科学研究費一般研究C。現在散佚した清朝の乾隆帝の絵画蒐集を復元して，その全貌と性格を把握することを目的とする。協力者戸田。

〔Ⅲ〕 宋元仏画，就中羅漢十王図の研究（43～44，共）

東京大学東洋文化研究所鈴木敬を代表者とする昭和43・44年度文部省科学研究費総合研究Aに分担者として参加。

〔Ⅳ〕 南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究（44～，共）

昭和44年度文部省科学研究費総合研究A。代表者として中川・田村・猪川・宮・戸田および東京国立博物館海老根聰郎・中島純司・東京学芸大学赤沢英二と研究班を組織。

田　実　栄　子（資料室）

〔Ⅰ〕 近世初期染織品の研究（43～44）

上杉神社所蔵の伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類の調査・研究を中心に徳川家康所用服飾類等同時代の服飾類，名物裂系統外来裂の調査・研究を続行。

〔Ⅱ〕 小袖の研究（43～44）

形態の変遷，模様の様式並びに技術・技法の変遷・進展，用布の地質の調査研究を続行。

〔Ⅲ〕 伝統的染織の調査・研究（43～44）

わが国における伝統的染織品並びにその技術・技法の調査を機会ある毎に行なって研究を続行。

〔Ⅳ〕 上代裂の研究（43～44）

主として東京国立博物館保管の正倉院裂・法隆寺裂を調査対象に研究を続行。

永　雄　ミ　エ（資料室）

〔Ⅰ〕 日本・東洋美術史の文献学的研究

辻　　惟　雄（資料室）

〔Ⅰ〕 初期狩野派の研究（43～44）

正信・元信から松栄・永徳にいたる初期狩野派の展開過程を各画家の伝記・作品の研究とあわせて検討する。すでに元信に関しては一応の研究をすませ，今後は松栄および永徳周辺にうつる。

〔Ⅱ〕 江戸狩野の研究（44）

探幽・尚信ら，いわゆる江戸狩野の形成過程を明らかにするための研究に着手する。

〔Ⅲ〕 江戸における表意主義的画家の系譜の検討（43～44）

岩佐又兵衛・狩野山雪・曽我蕭白・白隠・長沢蘆雪・伊藤若冲ら，江戸時代の画壇において独得の個性的作風を示す画家たちの伝記・作品および美術史上における意味の研究を続行。

〔Ⅳ〕 葛飾北斎の挿絵本の研究（44～）

とくに読本挿絵の持つすぐれた創造的性格を資料の収集と検討を通じて解き明そうとする。

江　上　　綏（資料室）

〔Ⅰ〕 平安朝の絵画的料紙装飾の研究（43～44）

平安朝の料紙に施された絵画的装飾を絵画史的見地から研究する

〔Ⅱ〕 日本古代文様の様式的，形式的研究（43～44）

日本古代文様全般を様式・形式の両面から研究する

関　口　正　之（資料室）

〔Ⅰ〕 密教画に関する研究（43～44）

十二天絵像・愛染明王画像を対象として取上げ先ず図像学的に検討し，次いで技法様式に関し考察を加える。

〔Ⅱ〕 浄土教画に関する研究（43～44）

阿弥陀来迎図・浄土変相図を中心に行なう。特に来迎図の変化に富む展開をあとづける。

〔Ⅲ〕 大理国仏画に関する研究（43～44）

故宮博物院蔵の仏画巻に描かれた諸尊を図像学的に検討することから始め，

その表現の特色と西域・西蔵美術との影響関係を検討する。

中村伝三郎（主任研究官）

〔Ⅰ〕 明治以降の主要彫刻家の伝記資料及び作品の調査研究（43～44）

(1) 明治彫刻の近代的蘇生に尽力した先覚者，竹内久一の業績について調査。

(2) 前々から執筆中の荻原守衛の<生いたち—在郷時代>について，後出の資料をもとに改めて考究。

〔Ⅱ〕 昭和初期の彫刻団体，構造社の調査研究（43～44）

明治以降における数少い彫刻運動の先駆的意義をもつ構造社について。

〔Ⅲ〕 現代日本彫刻界の動向についての調査研究（～44）

当美術部で年々編集，発行している「日本美術年鑑」のための現代美術関係資料の蒐集調査活動の一環として，特に彫刻界の動向を中心に常時調査考究している。

上野アキ（主任研究官）

〔Ⅰ〕 大谷コレクションの研究（43～44）

同コレクションの全貌把握のため諸種の資料の収集につとめると共に個々の作品について様式的検討を加える。

〔Ⅱ〕 中央アジア古代絵画史研究（43～44）

西アジアと中国本土の中間にあって独自の発達をとげた中央アジア古代絵画について，主として交渉史的立場から様式の考察を行なう。

〔Ⅲ〕 敦煌絵画研究（43～44）

敦煌壁画及びいわゆる敦煌画についてその展開過程を探ることを目的とする。

C 研究・調査活動（昭和43年4月より昭和44年12月までを記録）

中川千咲（美術部長）

〔Ⅰ〕 については古九谷大皿を中心として文様を収集しつつ分析整理を試み，また南蛮屏風に現われた工芸品について調査した。

〔Ⅱ〕 においては明治末大正初頭の陶磁を中心に工芸に関する文献，及び東京国立

博物館・東京芸術大学所蔵の工芸作品，出光美術館蔵の板谷波山写生帖・下図類の調査を行なった。

〔Ⅲ〕に関しては群馬県立博物館・伊勢崎市立図書館などにある主に古瀬戸作品について調査した。

なお43年度には平安時代漆芸品，特に仁和寺蔵の蒔絵宝珠笈及び関係資料につき調査研究を試みた。

久　野　　健（第一研究室長）

平安初期彫刻の調査研究のため昭和43年度においては，4月に観心寺の如意輪観音像，9月には唐招提寺・新薬師寺の仏像調査，10月には元興寺薬師如来像，44年の3月には奈良博物館において橘寺の日羅像，弘仁寺の明星菩薩像東大寺の弥勒像等の調査撮影を行なった。さらに44年度にも引きつづき平安初期の彫刻の調査をつづけ，6月には比叡山延暦寺の諸像の調査，12月には新発見の滋賀県日吉神社の千手観音像，菩薩立像，充満寺の諸像等の調査撮影を行ない，多くの成果を得ることができた。また鎌倉初期彫刻の研究に関しては，43年10月に常滑市附近の諸像を調査撮影し，44年5月には，九州仏教美術展出陳の諸像を調査撮影し，12月には，千葉市天福寺の本尊より建長8年の銘が発見され，調査を依頼されたために同像を精査した。光学的方法による日本彫刻の調査研究では，保存科学部の登石・江本・石川の諸氏と協同にて，主として小銅像及び押出仏の研究を行ない，多くの基礎資料を得ることができた。

柳　沢　　孝（第一研究室）

〔Ⅰ〕平安鎌倉時代仏教絵画の代表的遺品のうち，密教関係として，西大寺十二天・青蓮院青不動・明王院赤不動・持光寺普賢延命・藤田美術館両部大経感得図など，釈迦関係では応徳涅槃・釈迦金棺出現図など，浄土教関係では法華寺阿弥陀三尊及び童子・伝清海曼荼羅などの絹絵遺品のほか，富貴寺大堂・三千院阿弥陀堂の壁画などに関し，光学的方法による詳細な実証的調査を実施した。〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕昭和43年11月より44年1月までの間，欧米ならびにインド所在の日本及び敦煌請来の仏教絵画を調査するため出張し，特に米国では日本仏教絵画の重要作例に重点をおき，ボストン美術館とフリア美術館等で調査し，また白描図像に関しては，ボストン美術館・ロスアンゼ

ルス州立美術館・ニューヨーク公衆図書館等において調査を行なった。さらに敦煌将来絹絵についてはイギリス・フランス・インド及び米国の各美術館収蔵品を調査撮影した。

田 村 悦 子（第一研究室）

〔Ⅰ〕 個性的な書風を見せる藤原定家の筆蹟の研究に関し，今年度は従来知られていない彼の書写による長秋記の断片二葉を発見し，流布本にない貴重な部分を含むことを考証し発表した。〔Ⅱ〕 今日湮滅もしくは行方不明の墨蹟を研究するに有益なる文献である江戸初期の江月宗玩の「墨蹟之写」によって，和漢の墨蹟，特にその伝来を調査研究した。〔Ⅲ〕 かねて準備中の「異体字時代別表覧」の作成については，今年度は奈良時代の仏典・漢籍写本から異体字を収集整理した。

なお総合研究（A）「南北朝を中心とする日本中世美術の形成過程の研究」に「過渡期としての南北朝における書風の変遷の考察」を担当し，貞治二年の仏日庵公物目録に自賛頂相が載りながら，従来稀有でなおざりにされてきた断橋妙倫の墨蹟について，熱海美術館蔵の一幅を中心として研究し，その書風の淵源として南宋の書家呉説を指摘した。

猪 川 和 子（第一研究室）

昭和43・44年度は研究題目の〔Ⅱ〕「四天王彫像の研究」の一部である，十世紀の基準作例に見られる平安初期以前とはやや異った形式の諸像を中心として，これと同系の形式の諸像の整理考察を行ない，まとめることに重点を置いた。十世紀の基準作例を所蔵する諸寺の宗教的背景の考察，並びに経軌による図像的考察に資するため，文献資料の蒐集を行なった。この種の形式を受けつぎ，最も完成した美しさを示す浄瑠璃寺の四天王像について，京博・東博および寺において華麗な彩色・切金文様等細部の原色撮影と調査を行なった。さらに六波羅蜜寺・延暦寺・金剛峯寺・兵庫温泉寺・東楽寺・愛知普門寺・岐阜願興寺他，未調査の十余寺を実査し，論文として美術研究に発表した。〔Ⅰ〕 については，九州の仏教美術展出陳の全彫刻，及び観世音寺・富貴寺他の作例を実査，また，三千院修理の機に，阿弥陀三尊像を精査した。〔Ⅲ〕に関しては南北朝時代の作家及び作品の目録を作成，作品数点を実査した。

宮　　次　男（第一研究室）

絵巻　過去数年にわたり続けてきた宗俊本一遍上人絵伝の諸本の調査を43年4月の長野金台寺本・東博摸本の調査で一応終了，その結果を「遊行上人縁起絵巻」（角川書店）その他に発表した。また，43年秋から44年春にかけて土佐光信筆絵巻類を調査，結果の一部は美術研究260号に発表。

仏教説話図　43年1月～9月に目連救母説話諸本の調査を行ない，併せて目連救母経絵とわが国六道絵を比較検討し，美術史学会に発表，更に古美術23号・美術研究 255号に発表。44年6月～9月に金光明最勝王経の経文と経絵の対応及び経絵の定着方式について，中尊寺蔵の同経金字宝塔曼荼羅・長福寺蔵金光明経見返絵を研究調査し，その結果は仏教芸術44号に発表した。

肖像画等　羅漢・十王図については44年5月以降，高野山・堺市・大分県・福岡県・群馬県・茨城県等の寺院を調査，また44年10月～11月には京都御所の小野道風像及び東山御文庫の後鳥羽天皇御影・柿本人麿像を調査した。

戸　田　禎　佑（第一研究室）

宋元絵画史，就中，元代人物画の基礎資料の蒐集につとめ，この間43年10月には米国クリーヴランド市，クリーヴランド美術館に於て行われた元代美術展のシンポジウムに参加し，更に米国各地の元代絵画遺品の調査を行なった。これらの調査の結果は，45年6月に台北で開催される予定の中国絵画に関する国際シンポジウムの場で発表することになっている。

この他に，日本に舶載された中国絵画のうち明清画の遺品を集中的に調査し，写真資料の蒐集につとめた。これは日本南画研究のための一助となるはずであり，目下，具体的に日本南画と関係ある中国画の博捜につとめている。

岡　　畏　三　郎（第二研究室長）

43年—①工部美術学校を卒業，ロシア正教の信徒としてロシアに留学し，宗教画を学んだ山下りんの遺族が笠間市に，作品が函館その他に存在することが判明したので，遺族及び函館ハリストス正教会をたづね，伝記資料・作品の調査研究を行なった。②

大阪市立博物館寄託の主として明治前期の各種版画約千点を調査。③京都府画学校他美術教育関係を資料を調査した。

44年—①前年にひきつづき千葉県八日市場市の須賀教会，笠間市の遺族の許で山下りん関係並びに工部美術学校関係資料を見出し調査した。②神奈川県立近代美術館に於て小出楢重の作品百余点の調査研究を行なった。③本年より着手した明治美術の基礎資料の調査と収集は，まず東京・京都を主に，学校・図書館その他官公立機関における関係資料の種類と所在の調査を行なっている。

関　　千　代（第二研究室）

43年—近世初期日本洋風美術と，日本画との関連につき，長崎県平戸松浦資料館・長崎市立博物館他同県所在の資料についての調査を行なった。

大正期日本画について，土田麦仙書簡資料の蒐集調査をすすめた。

44年—皇居杉戸絵調査をまとめるにあたり，杉戸揮毫画家の伝記調査，並びに明治宮殿造営に関する資料を得るため，宮内庁書陵部に屢々出向調査を行なった。また揮毫者については，関西関係は，出張調査し，又地方は郵便連絡等により，略その目的を達し得た。その他，撮影の不備をおぎなうなど，44年は杉戸絵調査をまとめることに殆んどの時間を費した。そのほか，大正期日本画関係では，京都国立近代美術館における土田麦仙展（4月）に集められた下絵類の調査を行ない，又，松山市所蔵の長谷川竹友関係の資料を若干入手した。

坂　本　　満（第二研究室）

1）昭和42年11月より43年10月までフランス政府給費留学生として滞欧。その間パリ国立図書館版画部で主に日本初期洋風画の源泉となる銅版画の調査に努めた。それに関連して，フランス国内各地・イタリア・スイス・ベルギー・ドイツ・スペイン・ポルトガル・イギリス・ギリシア等の美術館・図書館・教会堂等を訪ねて見学調査，および資料蒐集をした。

2）昭和44年5月九州（平戸・長崎・島原半島・天草），7月佐野市，10・11月関西（大阪・京都・茨木市），12月水戸市等に主に日本近世洋風美術品の調査を行なった。

陰　里　鉄　郎（第2研究室）

①　先年度に引続いて総合研究初期洋風美術研究班に参加して，開国美術展における作品調査，長崎市の美術館・博物館蔵品の調査撮影を行ない，また平戸市松浦資料博物館において江戸期洋風摂取の源泉をなした当時の洋書類を調査し，複写した。

②　神奈川県立近代美術館の近代日本美術資料展に参画し，小山家蔵小山正太郎関係資料・長野市所在川上冬崖関係資料を調査し，明治初期洋画団体・洋画塾に関する文書資料類を調査研究した。同時に昭和初期洋画の小集団の資料を収集し調査した。

川　上　　涇（資料室長）

阿部コレクション・静嘉堂・井上房一郎氏・聖福寺・蔵本荘五郎氏・吉原一氏・小曽根均治郎氏・長崎県立美術博物館所蔵および大阪市立美術館の石濤八大と揚州八怪展出陳の中国画，静嘉堂・正木美術館所蔵および京都国立博物館の中世障屏画展出陳の日本中世絵画を調査した。

中国画家研究としては，清代揚州画家の1人華喦の没年，最初の揚州往訪の年次等を概定することができた。

東洋文庫に設けられた宋史提要編纂協力委員会の一員として，昭和36年以来宋代史年表の作成に従事していたが，44年1月北宋篇の刊行を見た。

田　実　栄　子（資料室）

研究題目の中，特に力を注いでいるのは「近世初期染織品の研究」で，昭和43年度44年度の二年間には，「上杉神社蔵服飾類の調査・研究」が昭和43年度科学研究費補助金の交付を受けたこともあって，米沢の上杉神社には7回，名古屋の徳川美術館には6回，山口県防府市の毛利博物館・仙台市博物館・宮城県白石市の片倉家・宮城県蔵王町の刈田嶺神社・水戸の徳川家に各1回，東京国立博物館には機会ある毎に実物調査を頻繁に行ない，文献調査と平行して研究をすすめた。

小袖の研究，伝統的染織の調査・研究，上代裂の研究は機会あるごとに従来通り，所蔵家や技術の現場に出向いて続行している。

辻　　惟　雄（資料室）

初期狩野派研究については，昭和43年・44年を通じ白鶴美術館・西脇氏・大聖氏・岡田氏・聖護院・二尊院・藪本氏等各方面の所蔵になる元信画・伝元信画の調査撮影などによる元信画の検討を続行，その結果を近く『美術研究』で報告の予定である。

科学研究費による調査研究については，昭和44年11月，岡山・尾道地方の絵画遺品の調査に参加，狩野松栄筆四季花鳥図屏風・伝狩野永徳筆風流陣図屏風など新たな資料多数を得た。

江戸時代画家研究については，昭和43年7月から12月にかけ『美術手帖』に「奇想の系譜」と題して岩佐又兵衛ら5人の画家の伝記作品を紹介，その内容にさらに調査検討を加えて昭和45年3月美術出版社より出版した。この間，ボストン美術館員ヒックマン氏と同道して草加市・松阪市などの曽我蕭白の遺品を調査し，新たな収穫があつた。また昭和44年より鈴木重三氏・築比寺仲助氏らの所蔵になる北斎の読本挿絵の調査撮影を継続している。

江　上　　綏（資料室）

平安朝時代の料紙装飾の研究としては，主として，西本願寺蔵国宝三十六人集の料紙装飾と静嘉堂蔵和漢朗詠集残巻のそれに重点を置き，本願寺本三十六人集については，これまで余りよい写真のなかった表紙絵と，現在その上に補強のための青紙が貼られていて見ることの出来ない見返しの散らし文様についてもX線透過法を用いて撮影と調査を行ない，これを研究した。この表紙絵は数少ない平安時代の小画面絵画の遺品の一つとして貴重なものであり，その研究の結果は近々『美術研究』誌上に発表の予定である。日本古代文様全般の様式的形式的発展の研究についても，現在資料を加えつつある。近くその中のいくつかの問題を特にとり上げる予定である。

関　口　正　之（資料室）

平安時代初期美術の総合的研究の中で絵画の調査を分担し，西大寺十二天絵像のX線撮影による基礎的調査を行なったが未完である。これに関連して密教画に関する研究調査をも行ない東寺十二天・五大尊像の調査と原家旧蔵愛染明王を調査した。

平安時代浄土教美術の総合的研究において絵画部門を分担し，阿弥陀来迎図・浄土変相図を対象の中心にして法華寺阿弥陀三尊ほか15件の絵画をX線フィルム・赤外線

フィルム写真撮影を実施し基礎的調査を行なった。また,阿弥陀堂建築内部の壁画（板絵）の調査に関しては大分県富貴寺の調査，京都三千院（往生極楽院）の仏後壁画・天井画の調査を実施した。

中村伝三郎（主任研究官）

43年—(1)　7年前から，昭和初期の構造社展で異色作家として謳われた陽咸二（昭10歿）を顕彰するため遺族に協力していたが，「陽咸二彫刻回顧展<3, 4～9>日本橋・ときわ画廊」（紹介文執筆）の実現をみたのを契機として，遺族のもとに遺された資料を中心に，その周辺及び現存関係者たちを通じて，彼の所属した構造社の活動につき調査を深めた。(2)　4月，第1回須磨離宮公園野外彫刻展<10, 1～11. 5>の委員を神戸市から依嘱されたので，5月中に現地会場を調査し，その環境にふさわしい主要テーマを協議決定し，招待作家を選出。10月4日現地での授賞作品の選考会議，翌5日の授賞式に出席。

44年—(1)　8月1日から新設開館の箱根—彫刻の森美術館の開館記念展「日本にあるヨーロッパ近代彫刻展」に参画し，個人所蔵品を主とする展示作品についての実地調査および選定に協力。(2)　第3回現代日本彫刻展<10, 1～11, 10>の審査委員に依嘱されたので，9月末より10月初めにかけて会場の山口県宇部に赴き，同時特別展「日本近代彫刻の史的展望」の調査を兼ねた。なお，暇をみつけ県下の諸文化財を見学。(3)　44年度科学研究費補助金（一般研究D）が「明治彫刻と竹内久一」に交付されたので，この調査研究を続行中。

上野アキ（主任研究官）

研究課題は従来より継続しているもので，1)　43年秋東博東洋館が開館したため，同館の所蔵品につき適時調査を続行している。2)　まず完全に中国文化圏に属し最も中国と密接な関係にあるトルファン地区の絵画遺品につきその様式の変遷を探ると共に，東西の接点である中央部のそれについても各国探険隊の将来資料により考察を進めている。3)　壁画については従来より引続き資料収集に努めているが，敦煌画中の幡画仏伝図について様式技法の検討を進めて来た結果を近く公表する。なお浄土教美術の総合研究に大陸に於ける浄土変相図の研究を分担し，日本の浄土教絵画の作例数

点及び富貴寺大堂の壁画調査に参加した。

D　主要研究業績（①：著書　②：論文　③：解説　④：研究発表⑤：講演・放送⑥：その他　昭43・4～昭44・12）

高田　修（美術部長）

②僧院と仏塔―インドにおける伽藍の形成―	仏教芸術69	43・11
②古典様式のヴィシュヌ神彫刻	美術研究257	44・3
③法隆寺壁画の主題	朝日新聞（夕刊）	43・5
⑤法隆寺の壁画	東京国立博物館友の会	43・5

中川千咲（美術部長）

①板谷波山（出光美術館選書5）	美術出版社	44・6
①明治の工芸（日本の美術41）	至文堂	44・9
②仁和寺蔵蒔絵宝珠筥の文様について	美術研究258	44・3
②明治末大正初頭の陶芸	美術研究261	44・12
④東京都下の工芸品	美術部研究会	43・6

久野　健（第一研究室長）

②古典美術の国風化	日本文化史概論	43・7
②平安初期における延暦寺の仏像	美術研究260号	44・9
③日本の彫刻　その二つの系譜	共同通信社	43・7
③平安木彫展解説	東京国立文化財研究所美術部	43・10
④観心寺の諸像について	美術部研究会	43・7
④関東の仏像彫刻について	神田学士会館	44・6
④延暦寺初期の仏像	美術部研究会	44・7
⑤奈良時代の文化	NHKテレビ	43・5
⑤日本の彫刻について	水戸文化センター	43・9
⑤上代の彫刻について　飛鳥―天平	東京国立博物館講堂	43・10
⑤仏像彫刻の話	浜松市公会堂	43・12

⑤現代鑑定術　NHK FM放送　45・1

柳　沢　　孝（第一研究室）

①仏画（原色日本の美術 7，高田修共著）　小学館　44・11
②道教の星曼荼羅　国華911　43・2
②仁平三年銘の持光寺蔵普賢延命絵像　美術研究254　44・2
②仁和寺宝珠筥納入の木製彩絵四天王像　美術研究258　44・3
③正倉院絵画作品解説（秋山光和氏と共著）　「正倉院の絵画」　43・7
③白衣観音・九曜秘暦・馬鳴菩薩他六点　『在外秘宝』仏教絵画　44・9
④仁平三年銘普賢延命絵像　美術部研究会　43・4
④在米の仏画　〃　44・6
⑤藤原仏画の展開　美術部公開学術講座　44・12

田　村　悦　子（第一研究室）

②藤原定家書写長秋記の別本の断簡について　美術研究259　44・3
②断橋妙倫の墨蹟について　美術研究261　44・12
③「男衾三郎絵詞」の断簡を見いだしたること
日本絵巻物全集（角川版）月報　43・7
③男衾三郎絵詞　学苑357　44・9
④藤原定家書写記録切三種について　美術部研究会　43・4

猪　川　和　子（第一研究室）

②四天王彫像
—十世紀の基準作例を中心とする形制の考察—上　美術研究263　45・1
②同　下　同　265　45・3
③1967年の歴史学界の回顧と展望（中世）　史学雑誌**77**, 5　43・5
③平安木彫展解説　研究所開所記念目録　43・10
③平安後期の美術（現代教養百科辞典—美術）　暁教育図書　44・9
④四天王彫像　美術部研究会　44・9

宮　　次　男（第一研究室）

①遊行上人縁起絵巻（角川源義と共編）　角川書店　43・9

①日本文化の歴史6「王朝のみやび」（竹内理三と共編）　学習研究社　44・9

②日本の地獄絵　古美術23　43・9

②時宗の絵巻　日本美術工芸362　43・11

②源氏絵の展開　国文学解釈と教材の研究14, 1　44・1

②後三年合戦絵巻をめぐる二・三の問題（下）　美術研究254　44・2

②目連救母説話とその絵画　美術研究255　44・3

②地蔵菩薩と目連尊者　日本美術工芸371　44・8

②足利義尚所持狐草紙絵巻をめぐって　美術研究260　44・9

②金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図私見　仏教芸術72　44・10

②大和文華館蔵「一遍上人絵伝」断簡をめぐって　大和文華51　44・11

④目連救母説話とその絵画―目連救母経絵の出現に因んで―

第21回美術史学会総会於東京大学　43・5

戸　田　禎　佑（第一研究室）

②冲黙筆懸崖双清図　美術史65　43・5

②元画十八羅漢図について　美術研究261　44・1

③季潭宗泐筆白衣観音図　古美術22　43・6

③李士達筆竹裏泉声図　美術研究261　44・1

④董源と巨然　美術部研究会　43・5

④巨然に関する諸問題　東大東洋文化研究所研究会　43・5

④李公麟孝経図巻と伝馬遠西園雅集図巻　美術部研究会　44・3

④明末の絵画　東大東洋文化研究所研究会　45・1

⑥宋代史年表（共著）　東洋文庫　44・1

⑥「中国版画集成」の書評　三彩224　43・1

⑥クリーヴランド元代美術展について　芸術新潮　44・1

秋　山　光　和（第一研究室）研究員（非）

①Arts of China（Ⅰ）-Neolithic Cultures to the T'ang Dynasty（関野雄ほか四氏と共著）　講談社インタナショナル　43・7

①絵巻物　小学館　43・7

①王朝絵画の誕生　中央公論社　43・10

①Arts of China（Ⅱ）-Cave Temples（松原三郎氏と共著）　講談社インタナショナル　44・7

②唐代の敦煌壁画―フォッグ美術館所蔵の断片を中心に―　仏教芸術71号　44・6

③正倉院絵画作品解説（柳沢孝氏と共著）日本経済新聞社刊「正倉院の絵画」　43・7

③海外美術館所在　日本上代中世絵画（法華堂根本曼荼羅など）作品解説　学研「在外秘宝」Ⅰ　44・9

③絵物語の流行　学研「日本と世界の歴史」10　44・9

③日本仏画作品解説　小学館「仏画」　44・11

⑤Two Aspects of Japanese Scroll Paintings in the Heian Period　Special Lecture in the Art Institute of the New York University　1968・12

岡　　畏三郎（第二研究室長）

①Masterworks of Ukiyoe "The Decadants"（共著）　講談社　44・

②山下りん筆「十二大祭図」について　美術研究258　44・3

②橋口五葉と大正版画　三彩243　44・6

③末期美人画　日本経済新聞社　浮世絵　44・3

⑤明治初期の洋画　美術部公開学術講座　43・12

⑥近代美術年譜Ⅲ　三彩社「現代の日本画」Ⅲ　43・6

関　　千　代（第二研究室）

②皇居杉戸絵について　美術研究264　45・2

③今村紫紅　月刊文化財57　43・6

③堅山南風の人と芸術　共同通信　43・10

③近代日本画作家（小学館百科辞典ジャポニカ）　小学館　43・12

③上村松園　新婦人新聞　45・2

③明治の日本画（近代日本絵画館）　講談社　45・1

⑥近代日本総合年表　岩波書店　43・11

坂　本　　満（第二研究室）

②ベラスケスの肖像画　別冊みづゑ57　44・11

②聖エラスムスとエラスムス像(上)(下)　美術研究263 264　44・9

③17,8世紀のイタリア・フランス・スペイン・イベリア諸国とその植民地の美術　現代教養百科10美術 暁教育図書KK　44・9

③バロック・ロココ・イタリアの宮殿　世界の文化史蹟15 ヨーロッパの宮殿(講談社KK)　44・10

③「美の美」(マニエリスム絵画を中心として数点)　日本経済新聞社　44・10～12

④イベリア美術紀行 (1.2)　美術部研究会　44・1～2

④日本キリスト教徒殉教図の二三について　美術史学会総会　44・5

④聖エラスムスとエラスムス像　美術部研究会　44・10

⑤スペイン—栄光への歴史　ブリヂストン美術館　43・10

⑥西洋近世工芸品解説翻訳　世界の美術館10 メトロポリタン　44・3

陰　里　鉄　郎（第2研究室）

②万鉄五郎　生涯と芸術(1), (2), (3)　美術研究255 258 262　44・3 44・3 44・12

②院展をめぐる日本画の革新　三彩250　44・10

⑥小野忠重著「江戸の洋画家」　SD46　43・9

⑥洋風画雑感　三彩236　43・10

⑥日本史—美術史「近代」　日本における歴史学の発達と現状Ⅲ　44・10

川　上　　涇（資料室長）

②張四教筆新羅山人肖像—華岳伝記の一資料　美術研究256　44・3

③故宮博物院　月刊文化財55　43・4

③東洋館開館　宋元名画の数々　ミュージアム212　43・11
④張四教筆新羅山人肖像　美術部研究会　43・4
⑤明清の文人画　美術部公開学術講座　43・12
⑥宋代史年表Ⅰ（共著）　東洋文庫　44・1

田　実　栄　子（資料室）

①上杉家伝来衣裳　講談社　44・4
②新指定重要文化財研究・紹介
辻ケ花染小袖併びに道服 上（北村哲郎氏と共同執筆）
ミュージアム210号　43・9
②　同　下　〃　213号　43・12
②伝上杉謙信所用陣羽織八領―伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査
報告五―　美術研究259号　44・3
⑤絞り染について―絞り特別展講演―　日本民芸館　44・6

辻　惟　雄（資料室）

①奇想の系譜　又兵衛―国芳　美術出版社　45・3
②奇想の系譜―江戸のアヴァンギャルド　美術手帖300～305　43・7～12
②三宅・御蔵・新島における英一蝶遺品の調査（共同執筆）　国華920　43・11
②英一蝶筆布晒舞図・同雨宿図解説　〃　〃
②初期風俗画と婿曳図―湯女図の原型をさぐる―　日本美術工芸373　44・10
②長谷川等伯（日本文化の歴史9・わびと黄金）　学習研究社　44・12
④曽我蕭白の伝記及び作品について　美術部研究会　43・6
④狩野元信の花鳥画　〃　44・6

江　上　綏（資料室）

④本願寺本三十六人集の表紙絵　美術部研究会　44・11

関　口　正　之（資料室）

③浄土教絵画解説　小学館「仏画」　44・11

中村伝三郎（主任研究官）

②銅像—その時代的背景—　月刊文化財67　44・4

②日本におけるヨーロッパ近代彫刻との交渉について

彫刻の森美術館開館記念目録　44・8

②荻原守衛　その生涯と芸術（中）—1　美術研究264　45・2

③中川清の彫刻　三彩236　43・10

⑤明治黎明期の彫刻　ブリヂストン美術館　43・4

⑤新海竹太郎とその周辺　ブリヂストン美術館　43・4

⑤明治の彫塑　美術部公開学術講座　44・12

⑥日展の彫塑　三彩238　43・11

⑥日本現代工芸美術展評　読売新聞夕刊　44・4

E　科学研究費題目

（Ⅳ予算2科学研究費補助金交付決定額の項参照）

(2) 芸能部

芸能部は，日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的理論的研究を行なう。

芸能部は，演劇研究室・音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室の三室より成る。

演劇研究室においては，日本古典演劇（主として歌舞伎・人形浄瑠璃などの近世芸能）を，音楽舞踊研究室においては，日本古典音楽及び日本古典舞踊（雅楽・声明・平曲・能・邦楽・邦舞など）を，郷土芸能研究室においては，全国各地に分布して伝統芸能の源流や展開の過程を示す民俗芸能を，それぞれの研究対象とする。

各室の研究目標としては，以上の諸芸能の理念・構造・技法・技術及びその継承保存に関する研究などがあり，その研究に必要な資料の収集・整備，記録の作成としての撮影・録音などの作業を行なう。また研究の結果は，刊行・講演会の開催などによって公表する。

一方，文化庁文化財保護部と緊密な連絡を保ちながら，その必要に応じ，無形文化

財保護行政に資する資料の作成を行なう。

A　研究・調査活動の概要

昭和43年度においては，芸能部全員による共同研究として，(1)歌舞伎音楽の研究，(2)古典芸能記録の整理方法の研究がある。

(1)については，杵屋栄左衛門氏所蔵の上方歌舞伎囃子の付帳を撮影し，この付帳写真の分析によって抽出した曲目を，上方の演奏家杵屋富造事小川政之助氏らに依頼して，その演奏の録音を企画し，研究所及び国立劇場の録音室において，3回に分割録音した。また杵屋栄二氏所蔵の付帳の一部を撮影し，この付帳写真によって，時代物50種目の分析カードを作成した。

(2)については，安原コレクション邦楽レコードのうち，先年刊行の「音盤目録Ⅰ」に所収済みのものを除き，1演劇，2音楽（義太夫節を除く），4巷間芸能・5郷土芸能・6郷土音楽・7その他の芸能の三部門を各研究室で分担，それぞれの整理方法について研究し，音盤目録Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ刊行の準備を進めた。

昭和44年度においては，前年度の研究を続行したが，特に新庁舎建設の決定した前年度末より，芸能部の施設となる録音室・調整室・視聴室の設計研究を行なった。さらに，これらの諸室の運用に必要な特殊機器についても，各地諸機関のオーディオ関係施設の調査を行ない，専門家の意見を聴取して万全を期した。

次に各研究室におけるおもな研究調査活動を挙げる。演劇研究室においては，近世演劇研究の基礎資料を収集するため，各大学・図書館所蔵の番付・役者評判記・歌舞伎脚本・浄瑠璃本などの調査・撮影・整理を続けたが，昭和43・44年度においては，東京芸術大学などの演劇資料の調査・撮影を行なったほか，東京大学図書館所蔵の紋番付及び阪急学園池田文庫所蔵の上方役割番付の写真整理に当たった。

音楽舞踊研究室においては，(1)東大寺修二会の調査研究，(2)能の様式の研究を行なった。(1)については，昭和40年から引続き，修二会の全期間を通じて，詳細な調査・録音を行なったほか，併せて写真撮影を遂行した。成果を45年度より逐次刊行する予定で，作業を進めている。(2)については，43年度に，面・装束，舞の基礎，曲舞謡・中ノリ謡，舞事特に乱・獅子等の構成及び技法の研究，44年度には，引続き舞事全般，翁，小書演出，小鼓一調等について，上記と同様の研究を行なった。

郷土芸能研究室においては，沖縄への渡航を初め，各県に出張しての実地調査のほか，東京における全国民俗芸能大会や，関東・東北・中部・近畿・中国・四国・九州など各ブロック別の大会に出場した芸能の撮影・録音などを行なった。また44年度においては，民謡歌詞集成の研究（各地伝承の民謡歌詞を既刊書目・現地調査資料等から収集し，整理分析する研究）として，既刊書目よりの収集調査を行なった。

なお，各研究室は人員寡少のため，随時，他の研究室員の応援参加によって作業を進めた。

B 研 究 題 目

浦 山 政 雄（芸能部長）

〔Ⅰ〕 近世戯曲の系統的研究（43～44）

歌舞伎脚本・浄瑠璃丸本・役者評判記・番付類の基礎資料により，近世戯曲の系統別に歴史的変遷を検討する。

〔Ⅱ〕 歌舞伎作者の研究（43）

壕越二三治・金井三笑・並木正三・並木五瓶などの狂言作者の作品を番付類により検討し，作者年表を作成する。

〔Ⅲ〕 歌舞伎音楽の研究（43～44）

歌舞伎囃子付帳の研究（44年度　科学研究費）を中心として，歌舞伎演出史を総合的に研究する。

前 嶋 茂 子（演劇研究室）

〔Ⅰ〕 掛踊の研究（43～44）

近世の民俗芸能の母胎となった伊勢踊・小町踊・鹿島踊等には掛踊の形式がみられ，その流れが各種盆踊にも及んでいる。その掛踊の発生と変遷および現状を明らかにする研究。

〔Ⅱ〕 天神信仰の研究（44）

民俗芸能における諸国に数多く所在する天神社の信仰とそれに関連のある芸能の研究。

〔Ⅲ〕 能の様式の研究（43～44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅳ〕 歌舞伎音楽の研究（43～44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

宮　本　瑞　夫（演劇研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 地方芸能文化史における舞台の研究（43～44）

全国に分布する農村舞台のうち，特に歌舞伎・人形芝居舞台など近世劇舞台の現状と変遷，およびそこに伝承保存されている芸能の調査研究。東日本地域の調査に重点を置いた。

〔Ⅱ〕 近世演劇資料の調査研究（43～44）

近世演劇に関する資料の調査・整理・発掘を目的とし，資料の収集・資料目録の作成・書誌的調査研究を行なう。浄瑠璃本・役者評判記を主としている。

藤　原　正　子（演劇研究室）事務補佐員（非）

〔Ⅰ〕 各地の人形浄瑠璃芝居の分布に関する研究（43～44）

各地に民俗芸能として残る人形芝居の現状を採集・調査すると共に，文楽として完成された人形浄瑠璃芝居に至るまでの伝播・変遷の経路を明らかにする研究。

〔Ⅱ〕 歌舞伎音楽の研究（43～44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

横道萬里雄（音楽舞踊研究室長）

〔Ⅰ〕 能の様式の研究（43～44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅱ〕 歌舞伎音楽の研究（43～44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅲ〕 各宗派声明・寺院行事の比較研究

佐藤道子技官を中心とする研究に参加，協力した。

佐　藤　道　子（音楽舞踊研究室）

〔Ⅰ〕 寺院行事の研究（43～44）

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から，芸能的要素を抽出し，各宗各派にわたる総合的比較研究を行ない，その変遷・分化をあとづける。

(1) 各宗派声明の比較研究

各宗派に共通の声明について，用法・奏演形式・発声法等の分析研究を行ない，その異同を明らかにし，特定宗派の独特な声明については，同様の方法で特色を明らかにする。

(2) 寺院に存在する呪師芸の研究

呪師芸と芸能との関連をたどるため，密教行事を中心として，寺院行事に現存する呪師芸について，研究調査を行なう。

〔Ⅱ〕 能の様式の研究（43～44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

松　本　　雍（音楽舞踊研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 能の演出研究（44）

能の演出面は江戸中期に固定したといわれるが，実際には多くの約束事にしばられながらもかなりの巾で変化して来ている。そこで時代・流派による演出の違いを調べ，その変遷を明らかにしようとする研究。

〔Ⅱ〕 能の様式の研究（44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

三　隅　治　雄（郷土芸能研究室長）

〔Ⅰ〕 念仏芸の研究（43～44）

全国に分布する民俗芸能のうち，特に分布範囲の広い念仏系統の芸能の現状と，その伝播・変遷の経路を明らかにする研究。太鼓踊・盆踊の調査に重点を置いた。

〔Ⅱ〕 離島の芸能の研究（43～44）

過去，孤立した立地条件のもとで多数の民俗芸能を保存し，現在人口流出等のためにそれらを失ないつつある各地離島を対象としての民俗芸能の調査研究。琉球列島を主にしている。

〔Ⅲ〕 歌舞伎音楽の研究（43～44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

〔Ⅳ〕 民謡歌詞集成の研究（44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

仲井幸二郎（郷土芸能研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 民謡の研究（43～44）

民謡歌詞の分類・調査を通して，完全な民謡テキスト作製のための研究，及び民謡研究の目的を究明する研究の一端として，民謡におけるはやしことばの分類・調査。

〔Ⅱ〕 話芸・寄席芸の研究（43～44）

邦楽レコードの分類により，落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究。

〔Ⅲ〕 民謡歌詞集成の研究（44，共）

年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

C　研究・調査活動（昭43・4～昭44・12）

浦山政雄（芸能部長）

1.　近世戯曲の系統的研究及び歌舞伎作者の研究のため，歌舞伎脚本・浄瑠璃丸本・役者評判記・番付類の基礎資料を収集することに努め，東大・東京芸大・阪急学園池田文庫及び国会図書館等の資料に当り，撮影・整理分析を行なった。

2.　歌舞伎囃子の付帳は，歌舞伎の演出記録の資料として重要なものだが，演奏家は秘蔵して他見をはばかる慣習がある。これらの所在を調査採集するため，杵屋栄二・栄左衛門氏所蔵の付帳の撮影・翻刻・分析を行なう一方，その他の演奏家，特に関西の付帳所蔵者を調査した。

3. 安原コレクション邦楽レコードの内，演劇に分類されるものの聴取・カード記入を終り，音盤目録Ⅱの刊行準備を進めた。

前　嶋　茂　子（演劇研究室）

掛踊の研究のため，その形式を残していると思われる各種の民俗芸能の資料の蒐集を行なった。

天神信仰の研究については，夏祭りを中心に，御霊信仰・天神信仰等に関する資料の蒐集を行ない，大阪天満天神の祭りを調査し，撮影した。

能の様式の研究および歌舞伎音楽の研究については，年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

宮　本　瑞　夫（演劇研究室）研究員（非）

近世農村舞台の研究のため，43年度には山形県西田川郡山五十川地区・三重県志摩郡安乗地区・滋賀県東浅井郡冨田地区・福井県坂井郡三国地区・富山県東砺波郡上梨地区および中新川郡池田地区・新潟県佐渡郡各地・栃木県各地など，東日本地域の歌舞伎・人形芝居舞台を調査し，記録・撮影を行なった。また44年度には山梨県各地・長野県小諸および上田地区・広島県佐伯郡原地区および吉田郡各地の歌舞伎・人形芝居舞台を調査し，記録・撮影を行なった。

近世演劇資料の調査研究については，主に浄瑠璃本・役者評判記を対象とし，43年度には東京芸術大学・日比谷図書館（加賀文庫・東京史料室）など所蔵の役者評判記を，また44年度には東京芸術大学・大谷図書館・山梨県立図書館・市立小諸図書館・市立上田図書館（花月文庫）など所蔵の浄瑠璃本・役者評判記の調査・撮影を行なった。

藤　原　正　子（演劇研究室）事務補佐員（非）

各地の人形浄瑠璃芝居の資料採集のため，44年度には徳島県各地・兵庫県・長野県下伊那・関東地方の人形芝居等を調査し，撮影・録音を行なった。

歌舞伎音楽の研究については，年間研究活動の概要欄に記した通りである。

横道萬里雄（音楽舞踊研究室長）

能の様式の研究および歌舞伎音楽の研究については，43年・44年度ともに，年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

各宗派声明・寺院芸能の研究に関しては，寛永寺・東大寺・新勝寺・遊行寺・延暦寺・園城寺等についての調査を，43・44両年度にかけて行なうほか，各宗現行の声明譜本の調査を行なった。

佐藤道子（音楽舞踊研究室）

研究目的に従って，43年度には天台宗寛永寺の年中諸行事，華厳宗東大寺の修二会・聖武天皇祭・山陵祭・転害会・仏名会，真言宗智山派新勝寺の本堂落慶記念諸法要行事，浄土宗増上寺の法然上人御忌法要，時宗遊行寺の踊躍念仏・薄念仏等の調査・録音・撮影を行ない，東・西本願寺の年中行事について，基礎調査を行なった。

44年度には，43年度に引続き，寛永寺の年中諸行事，および東大寺修正会・修二会・二月堂四箇法要・知識供・方広会について，調査・録音・撮影を行ない，両寺の年間主要行事に関しては，研究調査をほぼ完了した。

その他，和宗四天王寺の聖霊会，天台宗延暦寺の天台会・霜月会について，調査・録音・撮影を行ない，園城寺・教王護国寺の年中行事について，基礎調査を行なった。

能の様式の研究については，年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

松本　雍（音楽舞踊研究室）研究員（非）

能の演出研究のため，44年度は「三井寺」を取りあげ，観世会館・水道橋能楽堂等で現行五流の演出を調べ，法政大学能楽研究所・国会図書館等で古資料の調査を行なった。

能の様式の研究については，年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

三隅治雄（郷土芸能研究室長）

念仏芸の研究のため，43年度には各地の太鼓踊・盆踊の資料の蒐集を行ない，長野下伊那郡地方・秋田県各地・岩手県南部地方の盆踊，関東地方の小念仏等を調査し，

撮影・録音を行なった。また44年度には愛知県足助の盆踊，静岡県浜名湖周辺の大念仏，秋田県角館の飾山囃子等を調査し，撮影・録音を行なった。

離島の芸能の研究については，対象をもっぱら琉球列島の島々におき，43年度は八重山群島，44年度には沖縄群島を調査し，豊年祭・海神祭・綱引などにおける各種民俗芸能を撮影・録音した。

歌舞伎音楽の研究および民謡歌詞集成の研究については，年間研究調査活動の概要欄に記した通りである。

仲 井 幸 二 郎（郷土芸能研究室）研究員（非）

民謡のはやしことば研究に関しては，そのカード作製・分類を行ない，いわゆるはやしことばと考えられているもの以外に，ある目的を持って発せられる慣用的な語句に注目しつつ，その一覧表作製を行なっている。

民謡歌詞については，各民謡集や民謡レコード・地誌類より歌詞カードを作製，整理する作業を継続している。

その他，各地芸能調査を目的として，滋賀県湖東地方・京都府奥丹後地方などの現地調査を行なった。

民謡歌詞集成の研究については年間調査活動の概要欄に記した通りである。

D 主要研究業績（①：著書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表 ⑤：講演・放送 ⑥：その他 昭43・4～昭44・12）

浦 山 政 雄（芸能部長）

②おかげまいりの戯曲化	国語と国文学	43・10
②並木五瓶の東下をめぐって—東・西歌舞伎の合流に関して	日本文学の争点	44・3
③劇書偶感	古事類苑月報20	43・11
③顔見世浄瑠璃とめりやす	国立劇場プロ	44・1
③団十郎と藤十郎	日本演劇史展望	44・11
④篤交ぜについて	日本近世文学会	44・6
⑤日本の古典演劇	青山学院大学	43・5

⑤明治の邦楽解説　NHK Ⅱ　43・10

⑤おどりと劇　朝日講堂　43・11

⑤日本古典演劇の様式　明治大学　43・12

⑤邦楽鑑賞会解説　NHK Ⅱ　44・3

⑤歌舞伎の様式性　日本女子大学　44・10

宮本瑞夫（演劇研究室）研究員（非）

②「天神記」をめぐって　近松論集第5集　44・1

③民俗・風俗項目　小学館　大日本百科事典ジャポニカ3～11　43・5～44・12

③中世説話・縁起絵巻項目　東京堂　説話文学辞典　44・3

③民俗・風俗項目　第一法規　日本民俗資料事典　44・7

藤原正子（演劇研究室）事務補佐員（非）

②くぐつ資料集　芸能11, 8～12　44・8～12

横道萬里雄（音楽舞踊研究室長）

④語り物の系譜における義太夫節　東洋音楽学会　43・10

⑤能の特質　外務省研修所　43・1

⑤能と狂言のせりふ術　言葉の勉強会　43・4

⑤能と狂言の小歌　文化放送　43・4

⑤世阿弥の言葉　経済コンサルタント協会　43・6

⑯日本音楽道しるべ　NHK　44・

⑤世阿弥の道　上野学園　44・11

⑥日本音楽の生と死（映画）への製作協力　毎日放送　44・11

⑥狂言（文化庁映画）への製作協力　岩波映画　45・8

佐藤道子（音楽舞踊研究室）

⑤おどりの伝承　朝日講堂　43・11

松　本　　雍（音楽舞踊研究室）研究員（非）

②能の大成と世阿弥	教育音楽研究別冊	44・11
④能がかり狂言について	月曜会東京教育会館	44・9

三　隅　治　雄（郷土芸能研究室長）

①沖縄の芸能（編・共著）	邦楽と舞踊社	44・1
①雪祭り（編・共著）	東京堂出版	44・3
①民俗芸能（編・共著）	学芸書林	44・4
②日本の民俗芸能	桜菊174～179	43・7～44・5
②熊野―道成寺考―	歌舞伎2	43・10
②花のなかの日本人	学芸書林　伝統と現代9	44・1
②八重山の他界神	民俗芸能37～38	44・7～10
②ドラマにおける因果思想の展開	歌舞伎5	44・7
②諸国の神楽をたずねて	平凡社　日本の古典芸能Ⅰ	44・11
③祭り風土記	俳句**43**, 4～12	43・4～12
③南の島の歌と踊り	主婦と生活社・沖縄	43・12
③ノロの恋―巫女と性―	民俗芸能36	44・4
③笑いの周辺―ファルスの系譜―	日本美術12の6	44・9
⑤おどりの技法の流れ―念仏踊・小歌踊・盆踊―	朝日講堂	44・12

仲井幸二郎（郷土芸能研究室　研究員非）

②民俗生活における民謡の位置	芸文研究26	43・11
②生活の中の芸能	学芸書林　伝統と現代「民俗芸能」	44・4
②祝福とはやし―民謡はやしことば考―	慶応義塾大学言語文化研究所紀要1	45・3
⑤動きの基礎	朝日講堂	43・11
⑤民俗舞踊の庭―御所から河原まで―	朝日講堂	44・12
⑥雪祭資料文献校訂	東京堂出版　雪祭り	44・3

E　科学研究題目

（Ⅳ予算2科学研究費補助金交付決定額の項参照）

(3)　保存科学部

文化財自身の材質・構造・技法の科学的研究，並びに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行ない，これを基盤として文化財の保存と修復に関する技術的研究をしている。換言すれば，文化財の自然科学的研究，文化財を資料とする科学技術史的研究，文化財の保存と修理のための科学技術の応用研究の三方面がある。

研究組織としては，化学研究室・物理研究室・生物研究室・修理技術究研室の4研究室からなっている。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。即ち文化財を構成している各種素材の同定・分析から老化・崩壊過程の究明とその防止の化学的研究である。分析は微量分析及び非破壊分析を主として行なっており，老化防止・強化・接着等には合成樹脂等の応用開発に主力を注いでおり，又空気汚染の文化財への影響或は防虫防黴剤の適否についての研究を行なっている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表に関する事務をつかさどると規定されている。文化財自身の構造・強弱・安定等研究のため，材料試験を行ない或はX線写真・γ線写真等の特殊撮影を応用し，又，文化財の保存環境に関し，採光・照明・温湿度等の文化財に及ぼす影響とその防止の研究を行なっている。例えば美術品の博物館内での展示，収蔵庫内での収蔵及び梱包輸送に関し適正条件の設定と調節技術を開発している。

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。文化財に使用され又随伴している動植物的材質

の判定を行なうとともに黴及び菌・昆虫等による文化財の黴害・菌害及び虫害の防除のため保存環境の改善並びに黴及び菌・昆虫等の採取・同定・培養並びに採菌・殺虫のための薬剤と装置の開発を行なっている。

修理技術研究室

文化財の修理に関する科学的・技術的調査研究及びその結果の公表に関する事務をつかさどると規定されている。多種の絵画・彫刻・工芸品は勿論，木造建造物の天井・壁に描かれた絵画，柱・梁・組物等の彩色装飾及び障壁画並びに彫刻的細部から石造建造物の修理に及ぶ極めて広範囲の内容が対象とされている。したがって，化学・物理・生物の各研究室の協力のもとに調査研究が進められる。技術的には修理文化財を，(1)板絵・彩色木工品・漆芸品，(2)紙布に描かれた絵画，(3)土器・陶磁器・金工品・石造物の三種類に概ね分けることができる。調査研究は，現地へ出張する場合と，保存科学部アトリエ内に文化財を移動の上行なう場合とがある。アトリエは文化財修理の病室や治療室・手術室の役目を果たし，ここで徹底した科学的調査研究と，科学的処理で周到な修理が可能である。同時に過去の技術の復原と伝統技術の検討がなされる。

A　研究・調査活動の概要

昭和43年度．特別研究である「陳列室ならびに収蔵庫内の温湿度及び汚染空気が文化財に及ぼす影響とその防除」について，昭和42年度を第1年度とし，本年度は第2年度てとして引きつづいて実施した。国の補助金で建設された国宝重要文化財を収蔵するための鉄筋コンクリート造の収蔵庫について，京都地区5棟（高山寺・大覚寺・妙蓮寺・知恩院・平等院各所属）鎌倉地区2棟（杉本寺・青蓮寺各所属）並びに研究所内に前年度建設した実物二分の一大の鉄筋コンクリート造実験庫の内外の温度・湿度を測定し，四季の変化，竣工後の経年変化を調査して，それぞれの特性を把握した。特に法隆寺の収蔵庫は空調機械を使用した場合の問題が提起された。又新築コンクリート建造物内空気の偏苛性について，pH を指数として測定した結果，2年経れば苛性は減少すると考えられるが，夏季高温時は苛性が強くなる傾向があることが発見され，換気が有効と判明した。この苛性による染料・顔料の変色については，実験庫に試料を置いてその変化を分光反射率曲線であらわした。その結果特殊の影響の存在す

る方向を認めた。

昭和42年5月から実施した法隆寺金堂の試作パネル保存の現地実験は昭和43年7月まで継続された。その結果，パネルの変形と湿度の関係，変形による紙の張力の安全性，顔料の変質，防黴処置の効果等が明らかにされた。

考古学的遺跡の露出保存について，前年度に引きつづき，千葉市加曽利貝塚博物館の野外覆屋2棟について，貝塚断面及び住居址面の合成樹脂による存保処置を行なったが，特に住居址面での無機結晶の析出と菌類の発生が混在することが明らかとなり，その防除が新しい問題となった。

本年度において4件の受託研究を行なった（後記参照）。この以外に建造物彩色保存処置2件，遺跡保存2件，石造物修理2件，鉄器保存3件について科学処置を実施し又は指導を行なった。

昭和44年度．特別研究「陳列室ならびに収蔵庫内の温湿度及び汚染空気が文化財に及ぼす影響とその防除」については，前年度に引きつづいて，京都地区5棟，鎌倉地区2棟の鉄筋コンクリート造収蔵庫について，前年同様の温湿度と偏苛性の測定を行ない，実験庫は室内の右半分を板壁内張仕上，左半分を大谷石内張仕上として，内装材の室内気候等に及ぼす影響を比較した。なお本研究は，1年延ばして，昭和45年は新築される当研究所別館内に設けられる収蔵室等について，最終的測定を行なうことに決定した。

昭和45年開催の万国博覧会の美術展示に関して昭和43年度から美術館の設計のため，美術品の保存の立場から，照明・温湿度・空気汚染度について指導助言を行なってきたが，昭和44年12月竣工したので各種測定を行なっている。

本年度は，5件の受託研究（後記参照）を実施したが，栃木県大平町発見の七回り鏡塚古墳については，文化庁記念物課の要請によって，出土品を発掘現場から科学的処理を行ないつつ採取した。特に舟型木棺は巨大で，中の副葬品も水漬の状態で多数良く保存されていた。木棺は現地で合成樹脂 PEG の塗布含浸を繰り返えし実施し，多数の副葬品は保存科学部アトリエで，PEGの浸漬含浸或はアクリル樹脂の減圧含浸を行なった。副葬品には木製品・竹製品・金属器・革製品の各種があり，漆塗装や彩色も見られた。又木棺底面粘土から得られた繊維性の物質は，枕や褥に使用された2種類の苔類であったことを発見した。

京都清水寺の渡海船額末吉船図の一面の緑青部分変質流下汚染のクリーニングを，保存科学部アトリエで実施した。変質部が水に溶解することから作業は比較的簡単に行なわれた。

又日光東照宮陽明門天井絵の保存に関し，合成樹脂による剝落止めを指導し，かつX線による構造調査の上，無事取り外しに成功した。他に平賀源内エレキテル箱彩色保存処置を行なったほか，遺跡保存関係5件，石造関係2件，鉄器関係2件の科学処理を行なっている。

B 研 究 題 目

岩 崎 友 吉（化学研究室長）

〔Ⅰ〕 出土木製品の保存処置に関する研究（43～44，共）
〔Ⅱ〕 出土鉄製品の　〃　（43～44，共）
〔Ⅲ〕 石造文化財の　〃　（43～44，共）
〔Ⅳ〕 遺跡の　〃　（43～44，共）
〔Ⅴ〕 沖縄建造物塗装材料の老化試験　（43，共）
〔Ⅵ〕 油絵の保存に関する研究　（43～44）
〔Ⅶ〕 古代ガラスの研究　（43～44）
〔Ⅷ〕 和紙および表具技術の研究　（43～44）
〔Ⅸ〕 文化財の科学的保存技術の国際的比較（43～44）

樋 口 清 治（化学研究室）

〔Ⅰ〕 出土木製品の保存処置に関する研究（43～44，共）

PEG法，明ばん法，アルコールエーテル法，凍結真空乾燥法等を比較検討し，これらの処置方法を改良する研究。

〔Ⅱ〕 出土鉄製品の保存処置に関する研究（43～44，共）

出土後錆化による崩壊防止のため，アクリル樹脂溶液の真空含浸法を改良し，鉄器の表面を和紙等で包装してから真空含浸する新処置法の研究。

〔Ⅲ〕 石造文化財の保存処置に関する研究（43～44，共）

屋外にある石造文化財の強化処置として，エチルシリケート系薬剤を含滲し，これを加水分解して SiO_2 を石材中に析出せしめ，耐候性のよい強化処置をする研究。

〔Ⅳ〕 遺跡保存処置の研究（43～44，共）

住居跡・貝塚等を，合成樹脂の応用により強化し，崩壊を防止する処置法の実験的研究。

門　倉　武　夫（化学研究室）

〔Ⅰ〕 文化財の環境空気中の汚染因子の分析ならびに汚染の成因，挙動に関する研究（43～44，共）

(1) 東京・横浜・京都・宇治・箱根・熱海等の博物館美術館寺院等において，二酸化鉛法・アルカリ濾紙法を用いて，イオウ酸化物・窒素酸化物の測定，汚染度の経年変化の検討。

(2) 空気中の硫化水素・メルカプタンの測定法の検討および文化財環境空気中において汚染度の調査，発生源の究明。

(3) ガスクロマトグラフ法による炭化水素の分析，その挙動について。

〔Ⅱ〕 空気汚染が文化財に及ぼす影響に関する研究（43～44，共）

銅・銀板，および鉛系顔料に対する硫化水素・メルカプタンの影響について究明するため低濃度ガスにつきモデル実験を行ない変色度と濃度の関係を検討。

〔Ⅲ〕 文化財の材質調査に対するガスクロマトグラフの応用研究（43～44）

油絵具の油の分析法を確立するため試料の分解法，分析条件の検討，微少試料について適用法検討。

登　石　健　三（物理研究室長）

〔Ⅰ〕 新しいコンクリートがおこす屋内空気の偏苛性（43～44，共）

新しいコンクリート建築内では湿度の影響のほかに，空中にアルカリ性の汚れがおこり，美術品の材質のあるもの，特に油彩画の主原料であるアマニ油の硬化物に変色をおこす。その他の材質でも作用をうけるものが多い。

(1) 美術品諸材質への影響（43～44，共）

(2) 苛性微粒子の本質（44）

(3) 新施設内の状態測定とその時間的推移（43～44，共）

〔Ⅱ〕 写真撮影時の照明の被写文化財への影響とその対策（43～44，共）

フラッシュやストロボの光の紫外線による劣化作用と，写真電球光の加熱作用の解析，この際の被写体の防護。

〔Ⅲ〕 X線・γ線による文化財内部構造，欠陥等の透視研究（43～44，共）

医学におけるレントゲン透視と同様に文化財の内部の様相を知って，製作技法，修理状況，構造上の欠陥などを知る。

〔Ⅵ〕 法隆寺金堂壁画模作パネルの研究（43，共）

〔Ⅴ〕 陳列室ならびに収蔵庫内の温湿度および汚染空気が美術品に及ぼす影響（43～44，共）特別研究

見 城 敏 子（物理研究室）

〔Ⅰ〕 温湿度による文化財の材質への影響と保存法（43～44，共）

紙・皮・古代の漆膜を各温湿度中に放置した際の物性変化，木・紙に塗布されている顔料とニカワおよび油絵に使用されているアマニ油と顔料の各湿温度中における物性の経時変化を測定する。

〔Ⅱ〕 光による文化財の劣化とその防止に関する研究（43～44，共）

〔Ⅰ〕に光を照射させて，それらの劣化を経時的に測定し，その原因を追求し，各々の材質に適する保存法を研究中。

〔Ⅲ〕 梱包に関する基礎的データの研究（43，共）

各種木材の温湿度変化に対応する吸放湿性を研究する。

〔Ⅳ〕 文化財に適した湿度計作成（43～44，共）

市販の湿度計は大気中の汚染物やコンクリート中から出る苛性微粒子等でセンサーが劣化する。収蔵庫・博物館等で長期放置し，あるいは古墳の様に高湿度の場所に置いてもくるいの生じない湿度計について研究する。

〔Ⅴ〕 伝統漆工技術の科学的意義の探究（43～44）

ナヤシ・クロメの工程を経ず，温湿度を調節して，生漆の硬化過程を詳細に

探究し，生漆からの一工程漆工法の研究を行なう。

〔Ⅵ〕 着色うるし塗膜に関する研究（44）

漆塗膜の着色は経験と感によることが多い。顔料を漆塗膜の各硬化段階で添加，種々の温湿度の下で好条件を見出す。

〔Ⅶ〕 陳列室並びに収蔵庫内の温湿度および汚染空気が美術品に及ぼす影響とその防除についての研究（43～44，共）特別研究

石　川　陸　郎（物理研究）

〔Ⅰ〕 写真撮影時の照明の被写文化財への影響とその対策（43～44，共）

フラッシュやストロボの光の紫外線による劣化作用と，写真電球光の加熱作用の解析，この際の被写体の防護。

〔Ⅱ〕 X線・γ線による文化財内部構造，欠陥等の透視研究（43～44，共）

医学におけるレントゲン透視と同様に，文化財の内部の様相を知って製作技法，修理状況，構造上の欠陥などを知る。

〔Ⅲ〕 立体文化財の模型製作法（44）

脆弱な立体文化財の等高線正射投影写真法による実測図からの模型製作法の開発。

〔Ⅳ〕 陳列室ならびに収蔵庫内の温湿度および汚染空気が美術品に及ぼす影響（43～44，共）特別研究

江　本　義　数（生物研究室）研究員（非）

〔Ⅰ〕 国宝，重要文化財建造物及び美術品の黴害と防除

(1) 空中微生物の採取，その純枠培養，種の決定（43～44）

(2) 美術品に発生した菌の培養，防除並びに美術品の保存方法（43～44）

(3) 遺跡及び出土物の黴害，その防除及び保存（44）

〔Ⅱ〕 糸状菌の分類と保存

各社寺収蔵庫，絵画より採取した菌の分類と保存（43～44）

〔Ⅲ〕 陳列室及び収蔵庫内の温湿度及び汚染空気が美術品に及ぼす影響とその防除についての研究（43～44，共）

立　田　三　朗（修理技術研究室長）

〔Ⅰ〕 文化財の伝統的技法の調査及び記録作製（43～44，共）

建築彩色・出土木製品・彫刻・工芸品等の技法の調査と材質・素性の調査及び破損原因の究明。

〔Ⅱ〕 金工品のX線分析法及びガンマー線による材質及び技法の調査研究（43～44，共）

螢光X線による非破壊分析法とガンマー線透視法を利用し，金工品の材質及び技法構造等を調査研究する。

〔Ⅲ〕 合成樹脂による文化財の保存技術の研究（43～44，共）

金属・木工・石材及び彩色について合成樹脂による保存法と材質強化法・処置法・修理法を研究する。

中　里　寿　克（修理技術研究室）

〔Ⅰ〕 文化財の伝統的技法の調査及び記録作製（43～44，共）

建築彩色・出土木製品・彫刻・工芸品等の技法の究明と，材質・素性の調査及び破損原因の究明。

〔Ⅱ〕 X線透視による平安鎌倉時代漆芸技法の研究（43～44，共）

主に平安鎌倉時代の漆芸について，X線と顕微鏡を用い，材質・構造・施工法の調査研究を行ない，合せて実測を記録する。

〔Ⅲ〕 古代漆膜の研究（43～44，共）

古墳時代の出土漆芸品について，その漆膜の施工法，漆の材質，漆の老化等について，視覚的に調査研究する。

茂　木　　曙（修理技術研究室）

〔Ⅰ〕 合成樹脂による文化財の彩色保存技術の研究（43～44）

建造物・絵画・彫刻等に描かれている彩色の合成樹脂による保存のための技術的研究。

〔Ⅱ〕 受託研究による科学的保存処置（44～44，共）

研究を依託されたものの内から，主に彩色保存に関する技術的研究。

江　本　義　理（主任研究官）

〔Ⅰ〕 文化財の材質に関する研究（43～44）

非破壊的分析法および微量試料による分析法の検討とその感度・精度の向上に関する研究。X線分析・赤外線分析・熱分析などによる材質の判定，変質・劣化および技法に関する研究。科研費（総合）「近世初期日本洋風美術の実証的研究」（代表者岡畏三郎）の顔料等の材質研究を分担（43）。

〔Ⅱ〕 考古遺物・遺跡に関する考古化学的研究（43～44）

遺物の材質研究ばかりでなく，埋蔵環境と埋蔵時の遺物の変質との関連，出土後の変質，劣化の機構や過程を究明する。

科研費（総合）「日本初期金属遺物の製産に関する研究―青銅器を中心（代表者 三木文雄）の材質研究を分担（44）。

〔Ⅲ〕 空気汚染の文化財に及ぼす影響に関する研究（43～44，共）

ガスクロマトグラフィーなどによる汚染因子の究明と二酸化鉛法・アルカリ濾紙法などによる汚染度の測定，金属板の大気腐食度による影響の判定とその防除法，並びに陳列室や収蔵庫の保存環境の調査。

C　研究・調査活動（昭43・4～昭44・12）

岩　崎　友　吉（化学研究室長）

加曽利貝塚貝層断面および住居址の保存処置を開始続行中。	43
沖縄の木造文化財に対する赤色塗料の耐候試験を実施。	43・5
沖縄那覇市石造文化財天女橋修理指導のため出張。	43・9
品川ガラス工場跡緊急発掘に協力，出土資料を整理中。	43・9
川崎市寺尾台遺跡の保存処置を指導し，地層の断面標本を作製。	43・11
赤坂離宮天井絵画の保存作業に協力，続行中。	44・3
ローマセンター第5回総会（於ベニス）に日本政府代表として出席，理事に当選文化財保存上の諸連絡を行ない，センターの事業計画委員に指名された。	44・4
栃木県七回り鏡塚古墳の出土品保存処置指導，続行中。	44・5

愛媛県上黒岩遺跡の保存作業指導。　44・3

ICOM 第9回総会（於アムステルダム）出席，技術の交流を行ない，

三研究グループの委員となった。　44・9

熊本県横山古墳壁画応急保存処置指導。　44・12

樋口清治（化学研究室）

昭和43年より千葉市加曽利貝塚において，貝塚断面および住居跡の合成樹脂による保存処置を実施し現在なお継続中である。この際出土人骨の取り上げ方法につき新しい方法を試み成果をあげた。

出土鉄製品の保存処置に関し，和紙で包装して合成樹脂溶液を減圧含滲する方法を開発し，日光男体山山頂出土鉄器約千点以上を始め，各種の錆化鉄製品の保存処置をおこなった。またこの方法を平城宮跡・宮崎県立博物館を始め各地に普及させた。昭和44年4月より栃木県大平町鏡塚古墳出土遺物一括の保存処置を受託研究として現在なお続行中である。

石造文化財の保存処置としては，昭和43年に引き続き紀州明恵上人卒塔婆の樹脂充填による保存処置を指導した。また凝灰岩のような脆弱化した石の強化処置として，耐候性に優れたエチルシリケートの応用を研究し，重要文化財於美阿志神社十三重塔の保存処置を指導した。

門倉武夫（化学研究室）

前年度に引き続き収蔵庫内外文化財環境空気中の汚染因子を測定するため京都市知恩院・妙蓮寺・大覚寺・高山寺ならびに宇治市平等院，鎌倉市青蓮寺・杉本寺において活性炭吸着法により空気試料を採取し，ガスクロマトグラフ法で分析した。平等院・妙蓮寺で硫化水素・メルカプタンを測定した。

文化財環境空気中のイオウ酸化物・窒素酸化物の経年変化を検討するため上野・浅草・横浜・京都・宇治・箱根・熱海等の博物館・美術館・寺院において計24カ所で過酸化鉛法・アルカリ濾紙法により空気汚染度を測定した。

文化財におよぼす低濃度の硫化水素・メルカプタンの影響についてガラス容器中で銀・銅・鉛系顔料に対しモデル実験した。

美術品の材質調査として，ガスクロマトグラフ法により油絵具の油の分析，使用油の同定法に関する予備実験，亜麻仁油・えの油等に対する微量試料（0.1 g 以下）の分解，ガスクロマトグラフ分析条件，絵画の油の分析法を検討，実験した。

登　石　健　三（物理研究室長）

万国博覧会の開催に関連して，まず民間の一行事であるタイムカプセル計画に参加，度々技術的協議をした。又同美術展示館の保全については専門調査員として空調関係・照明関係等の調査に従っている。その他この期間の活動の主な目的も展示・収蔵などの施設の屋内状況を知ることで，これには特別研究費による調査研究も一環として含まれている。43年8月の京都知恩院・妙蓮寺・大覚寺・平等院収蔵庫の調査，44年3月の鎌倉青蓮寺・杉本寺収蔵庫調査がこれに該当する。その他は先方の求めによる展示・収蔵の適性しらべが多い。東博東洋館・小田急百貨店催会場・中尊寺・近代美術館・びわ湖博覧会・富士銀行（オリンピック旗保管）・金沢文庫・神奈川県立博物館・国立劇場・京都博物館・知積院・東博における欧州展準備室などである。そのほか法隆寺金堂壁画模作パネル調査を43年7月に行なった。鎌倉高徳院は43年11月2回44年1月2回調査した。昔の写真を得たので同一地点から同一方向で撮影し比較するためである。

見　城　敏　子（物理研究室）

昭和43，44年度は主に収蔵庫内外の温湿度，苛性微粒子による偏苛度を測定した。44年2月，10月に，京都府妙蓮寺・高山寺・大覚寺・知恩院・宇治市平等院の収蔵庫を測定した。鎌倉市杉本寺・青蓮寺・極楽寺・証菩提寺は月に一回測定した。44年11月に厳島神社の収蔵庫の環境状況，鳥居の顔料の変退色，腐蝕状況を調査した。東洋館・近代美術館・神奈川県立博物館の会場・収蔵庫を測定した。

石　川　陸　郎（物理研究室）

X線 r 線による文化財内部調査については44年2月に延暦寺・金剛寺・京都博物館・奈良博物館・藤田美術館等の平安時代作製の漆芸品の構造調査を実施，44年8月には日光輪王寺五大明王の構造及び後補箇所の調査，東照宮陽明門天井絵の修理に伴う布

着せの有無等の諸調査を行なった。「陳列室並びに収蔵庫の室内温湿度及び汚染空気が美術品に及ぼす影響」の一環として43年11月に京都府の大覚寺・知恩院・高山寺・妙蓮寺・平等院・仲源寺等の偏苛性及び温湿度の経年変化の測定，鎌倉市の青蓮寺・杉本寺・証菩提寺・極楽寺等について前記同様の測定を行なった。43年8月には先方からの依頼でびわ湖博覧会開催にあたり美術品陳列館内の温湿度・偏苛性についての測定を行ない会期中の美術品の安全をはかるため諸調査を行なった。44年11月には厳島神社の収蔵庫の環境調査，鳥居の顔料の変退色状況，腐蝕状況等の調査及び岩国の西村美術館の陳列状況など調査し収蔵庫問題の参考に供した。

江　本　義　数（生物研究室）研究員（非）

富士銀行本店

オリンピック旗保存のための防黴・防虫（43）

千葉市

千葉県千葉市加曽利貝塚の黴害調査とその防除（43～44）

京都博物館

彦根屏風黴害調査と防除指導（44）

東京博物館

御物十六羅漢絵画の黴害調査と防除（44）

後白河法皇御木像の黴害調査と防除指導（44）

栃木県大平町出土の蘚類の研究（44）

京都市高山寺・妙蓮寺・知恩院・大覚寺・仲源寺，宇治市平等院各収蔵庫内の空中微生物の調査（43～44）

立　田　三　朗（修理技術研究室長）

43，44年度の受託研究によって，東福寺三門内部彩色の，特に天井紙貼彩色絵の保存処置法について検討し，又称名寺本堂板絵彩色と石山寺三重塔四天柱彩色について処置法を研究した。又輪王寺蔵五大明王像については立体像における彩色保存の処置法，清水寺絵馬については彩色変質状態における処置法を調査研究した。金工品については鳳来寺境内出土鉄器・二荒山山頂出土鉄器・松本市出土鉄製ごま炉等，特に鉄

製品の保存処置法について研究を行ない，平等院屋上銅製鳳凰について技法調査を行なった。石材の保存処置法については和歌山県明恵上人遺跡の破損状態の異なる7基の卒塔婆について調査を行なった。

又東京都の文化財綜合調査として43年7月23日より8月20日まで，荒川流域を調査した。

中　里　寿　克（修理技術研究室）

平安鎌倉時代漆芸品を，43年度は科学研究費により約10点，44年度は5点をX線，顕微鏡等を用いて調査し，技法研究を行なった。又受託研究費により東福寺・称名寺の建築彩色，輪王寺板絵の彩色について調査撮影を行なった。又，大平七廻り遺跡の出土遺物のうち，漆芸品について漆膜の調査を行なった。

茂　木　　曙（修理技術研究室）

合成樹脂による彩色保存のための技術的研究を行ないその対象となったものは東福寺三門上層内部彩色(41年度～43年度)・久能山東照宮本殿内部彩色・南部利康霊屋建築彩色・輪王寺五大明王像の極彩色・称名寺本堂壁画・石山寺多宝塔内部巻柱の彩色などがあり，日光陽明門天井取外しのための剝落どめ指導も行なった。

江　本　義　理（主任研究官）

材質研究―明治建築の塗装，屋根板などを，山形済生館本館（43・6），東大標本館ほか1件につき，X線分析，塗膜セクションの顕微鏡的研究などを行なった。京都清水寺の絵馬（末吉船）の変質汚損，奈良於美阿志神社十三重塔（44・6），法隆寺金堂壁画再現用顔料（43・7）に関して材質，変質について調査。

考古化学的研究―栃木県大平町七回り鏡塚発掘に立会い（44・4），その後金属器・顔料・漆などの材質研究と共に，遺物の埋蔵環境と変質過程を推定，さらに研究続行中。装飾古墳の顔料・石の変質研究の事前調査として，福岡県王塚・竹原など，熊本県千金甲・チブサンなど計12カ所を調査した（44・5）。また年代測定のシンポジウム（京大原子炉実験所）に出席（43・9）。銅鐸（16点）・三角縁神獣鏡など（14点）・中国古銅器（7点）その他の材質研究を行なった。

空気汚染—上野・横浜・鎌倉などで汚染度，腐食度の測定，その他収蔵庫内外の保存環境調査に参加した。

D　主要研究業績（①：著書　②：論文　③：解説　④：研究発表⑤：講演・放送⑥：その他　昭43・4～昭44・12）

岩崎友吉（化学研究室長）

①絵画の修復と保存（分担）　世界の文化史蹟14　43・10

②木製品の保存処置（第一報）（共著）　保存科学5　44・3

②考古学的出土遺物の科学的保存処置　ミュージアム224　44・11

⑤埋蔵文化財の保存処置　記念物課発堀技術者研修会　43・8

⑤合成樹脂による文化財の保存修復処置　「ポリマーの友」主催座談会　44・7

⑤出土品の科学的保存処置　東京国立文化財研究所開所記念日講演会　44・11

⑥ハワイ出張小報告（続）ビショップ博物館を中心に　博物館ニュース(日博協)3-1　43・4

樋口清治（化学研究室）

②木製品の保存処置（第1報）（共著）　保存科学5　44・3

③考古学的出土遺物の保存処置（共著）　日本考古展目録　44・10

④国宝元興寺極楽坊五重小塔修理工事報告書（樹脂加工の部分）（共著）　国宝元興寺極楽坊五重小塔修理工事報告書　44・3

⑤文化財修理における合成樹脂について　美術工芸課修理技術者講習会　43・11

⑤埋蔵文化財の保存処置　記念物課埋蔵文化財発掘技術者研修会　43・8

⑤　〃　〃　44・8

⑤七廻り鏡塚出土品の保存処置について　栃木県大平町社会教育研究大会　44・12

⑤合成樹脂による文化財の保存修復処置　「ポリマーの友」主催座談会　44・9

登石健三（物理研究室長）

②うちたてコンクリート室内における美術品の材料の変化とその危険度の判定法に関する基礎実験（共著）　色材協会誌41, 4　43・4

②A simple method of measuring the alkalinity of air in new concrete buildings（共著）　Studies in Conservation **13**, 4　43・11

②文化財撮影時の照明に対する安全についての考察（共著）　保存科学 5　44・3

③展示の科学　月刊文化財58　43・7

③館内空気状況の問題　金沢文庫研究151　43・11

③博物館照明　博物館研究**41**, 4　43・12

⑤保存科学について（所有者・管理者講習会（管理課））　熱海・名古屋　43・9　大宮　43・10

⑤保存科学（昭和44年度文化財（美術工芸品）管理研究協議会）　金沢・長野　44・6　仙台　44・7

⑤科学的調査法について（第14回修理技術後継者（美術工芸品）養成講習会）　京都国立博物館　44・10

⑤美術品撮影時の写真照明　開所記念講演会　44・10

⑥Art and archaeology technical abstracts へ抄録報告　AATA Abstracts　43—44

見　城　敏　子（物理研究室）

②うちたてコンクリート室内における美術品の材料の変化とその危険度の判定法に関する基礎実験（共著）　色材協会誌**41**, 4　43・4

②A Simple method of meeuring the alkalinity of air in new Concreat building（共著）　Studies Consevation**13**, 4　43・11

石　川　陸　郎（物理研究）

②法隆寺献納宝物乾漆伎楽面の製作技法について試考—X線透視による漆芸品の研究—（共著）　ミュージアム206　43・5

②文化財撮影時の照明に対する安全についての考察（共著）　保存科学 5　44・3

②平安時代漆芸技法資料（Ⅲ）（共著）　保存科学 5　44・3

江　本　義　数（生物研究室）研究員（非）

②重要美術品などの保存とカビ　博物館研究**41**, 3　43・9

②為替バンク三井組の柱頭と柱頭盤　博物館研究**41**, 4　43・12

②法隆寺金堂焼損壁休の黒斑と黴　保存科学 5　43・8

立　田　三　朗（修理研究室長）

②平安時代漆芸技法資料Ⅲ（共著）　保存科学 5　44・3

②金色堂堂内装飾の工芸技法について（共著）　仏教芸術72　44・10

中　里　寿　克（修理技術研究室）

②法隆寺献納宝物乾漆伎楽面の製作法について—X線透視による漆芸品の研究（共著）　ミュージアム206　43・5

②平安時代漆芸技法資料Ⅲ（共著）　保存科学 5　44・3

②金色堂堂内装飾の工芸技法について（共著）　仏教芸術72　44・10

茂　木　　曙（修理技術研究室）

②知恩院経蔵内部彩色保存処置　保存科学 5　43・3

江　本　義　理（主任研究官）

②智光曼荼羅の素材について　智光曼荼羅（学術書出版会）　44・3

②古文化財のX線分析法による材質測定資料Ⅱ　保存科学 5　44・3

金属—漆芸品—蒔絵材料，顔料—考古資料（土器彩色など），顔料—建築彩色

②桜ケ丘8号銅鐸など螢光X線分析について（神戸市桜ケ丘銅鐸銅戈調査報告書）　兵庫県文化財調査報告 1　44・3

②仁和寺蔵宝珠筥納入の板絵四天王の彩色顔料の分析　美術研究256　44・3

②東照宮奥社殿外装金具の材質　大日光32　44・5

②考古資料の化学的研究—考古化学とは　ミュージアム225　44・12

③大気汚染による美術品の腐食　金属**39**, 5　44・3

③汚染される文化財の防錆対策　表面処理ジャーナル**2**, 3　44・3

E　科学研究費題目

（Ⅳ予算2科学研究費補助金交付決定額の項参照）

F　受　託　研　究

昭和43年度

〔Ⅰ〕 東福寺三門内部彩色剝落どめ（41～43年度）

三門解体修理が計画され，解体時の震動で上層内部に画かれている彩色が剝落するのを防ぐ目的で剝落どめ処置を実施した。昭和41年度から継続され，43年度で終った。

〔Ⅱ〕～〔Ⅲ〕 輪王寺木造五大明王像の内二体（不動・大威徳）の彩色保存処置

輪王寺三仏堂の一隅に安置されていた五大明王像は木造寄木造りで極彩色が施されているが，中禅寺の新堂に移納するため彩色の剝落どめを中心とした保存処置を実施した。今年度は不動・大威徳の二体を行なった。

〔Ⅳ〕 日光二荒山出土鉄器保存処置

出土鉄器の錆による崩壊防止の処置として，表面に樹脂光沢が残らないように鉄器を和紙で厚く包み，そのままアクリル樹脂を減圧含滲する方法を開発し，男体山出土の鉄器の保存処置を実施してこの処置法を検討した。

昭和44年度

〔Ⅰ〕 石山寺多宝塔内部柱彩色保存処置

多宝塔内部全体に亘っての合成樹脂による剝落どめはすでに行なわれたが，特に巻柱の彩色についての剝落どめ処置が必要となり，本年度の終りにその部分についてのみ実施した。

〔Ⅱ〕 称名寺本堂壁画剝落どめ

本堂内の壁画二面の内，弥勒来迎図に対しては，過去に合成樹脂による剝落どめが行なわれた。今回は弥勒浄土図を主体に行なった。

〔Ⅲ〕 輪王寺五大明王の内三体（軍荼利・降三世・金剛夜叉）の彩色保存処置

木彫寄木造り極彩色の剝落どめを主体とした保存処置を前年度に行なった。引続き軍荼利・降三世・金剛夜叉の三明王についての保存処置を実施した。

〔Ⅳ〕 七廻鏡塚古墳出土品保存処置

この古墳出土の遺物は出土状態が極めてよく，王纒大刀始め考古学上貴重な

ものが多い。材質的には木・漆・皮・金属等多様で，処置方法も PEG 法を始め各種の方法が必要であり，現在進行中であるが，保存技術上の興味は深い。

〔V〕 日光二荒山出土鉄器保存処置

前年度において実施した鉄器の保存処置を今年度も引続き年度末に行なった。

国立文化財研究所研究受託規程（昭和34年4月30日文化財保護委員会告示第14号）

（趣旨）

第1条　国立文化財研究所（以下「研究所」という。）が委託により行う文化財に関する科学的調査研究（以下「研究」という。）については，この規程の定めるところによる。

（委託の申込）

第2条　研究所に研究を委託しようとする者は，第1号様式による研究委託申込書を国立文化財研究所長（以下「研究所長」という。）に提出しなければならない。

（受託）

第3条　研究所長は，前条の規定による委託の申込を承諾する場合には，第2号様式による研究受託承諾書を当該研究を委託する者（以下「委託者」という。）に交付する。

（費用の負担）

第4条　委託者は，その委託にかかる研究を実施するために必要な次の各号に掲げる費用の合計額に相当する金額を負担しなければならない。

一　国家公務員等の旅費に関する法律（昭和25年法律第114号）及び文部省所管旅費規則（昭和25年文部省訓令）の規定による旅費

二　器具機械費，消耗品費，通信運搬費，賃金その他研究に要する経費

（費用の納入等）

第5条　委託者は，前条の規定により負担すべき費用を文化財保護委員会歳入徴収官の発行する納入告知書により前納しなければならない。

2　研究所は，研究が終了した結果，前項の規定により納入した金額に過不足が生じた場合には，委託者にその額に相当する金額を返還し，又は納入させなければなら

ない。

3　委託者が第1項の規定による費用を納入告知書に定める期限内に納入しないときは，委託を取消したものとみなす。

（研究の中止）

第6条　研究所は，研究所の業務に支障があるため，又は災害その他やむを得ない理由があるため研究の継続が困難となったときは，当該研究を中止することができる。この場合において，研究所長は，遅滞なくその旨を委託者に通知しなければならない。

2　前項の規定にかかわらず，研究所は，委託者の申出によりその委託にかかる研究を中止することができる。

3　研究所は，第1項の規定により，研究を中止した結果，前条第1項の規定により納入した金額に過剰を生じた場合には，その額に相当する金額を返還しなければならない。

（研究の結果の報告）

第7条　研究所長は，研究が終了し，若しくは中止されたときは，遅滞なくその結果を委託者に報告しなければならない。ただし，研究の過程において委託者の求めに応じて中間報告をすることができる。

（研究の結果の公表）

第8条　研究の結果の公表は，研究所がこれを行う。

（損害賠償の免責）

第9条　研究所は，天災その他研究所の責に帰すことができない理由によって，研究に関し委託者の受ける損害については，その賠償の責を負わない。

（委託者の協力）

第10条　委託者は，研究所長の承認を得て，その委託にかかる研究に関し協力することができる。

附　則

この規程は，公布の日から施行し，昭和34年5月1日以後に行われる委託の申込から適用する。

（第一号様式）

研　究　委　託　申　込　書

昭和　　年　　月　　日

国立文化財研究所長　殿

現住所

氏　名　　印

国立文化財研究所研究受託規程に基き，下記内容をもって，文化財に関する科学的調査研究を委託したいので申込みます。

記

1	題　　目	
2	目的及び内容	
3	予算の範囲	
4	器具，資材等提供の有無（品名，数量，提供の時期等）	
5	完成希望期限	
6	公表猶予期限	
7	その他希望事項	

（第二号様式）

研　究　受　託　承　諾　書

昭和　　年　　月　　日

殿

国立文化財研究所長

昭和　　年　　月　　日付研究の委託の申込は，国立文化財研究所研究受託規程に基き，下記条件をもって，これを承諾します。

記

1	題　　目	
2	担当者氏名	
3	完了予定期日	
4	所要費用担当額	
5	所要費用納期	
6	提供を要する器具ならびに資材（品名，数量，提供の時期等）	
7	そ　の　他	

2　事　　業

(1)　出　　版

A　美術研究

昭和7年1月創刊，昭和45年3月第266号を発行。当研究所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌。主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し，ときに所外研究者の寄稿を受けることもある。A4判，各号本文42頁，原色図版1，単色図版5，各年度6冊刊行，ただし44年度に7冊刊行した。

昭和43年度（第254号～第259号）

昭和44年度（第260号～第266号）

以上の「美術研究」の論文題目は次のとおりである。

美術研究　第254号　　昭和44年2月

仁平三年銘の持光寺蔵普賢延命菩薩絵像	柳沢　孝
後三年合戦絵巻をめぐる二，三の問題　下	宮　次男

美術研究　第255号　　昭和44年3月

目連救母説話とその絵画―目連救母経絵の出現に因んで―	宮　次男
万　鉄五郎 (一) ―生涯と芸術―	陰里鉄郎

美術研究　第256号　　昭和44年3月

仁和寺蔵宝相華蒔絵宝珠箱の文様について	中川千咲
仁和寺蔵宝珠筥納入の板絵四天王像について	柳沢　孝
附載　仁和寺蔵宝珠筥納入の板絵四天王の彩色顔料の分析	江本義理

美術研究　第257号　　昭和44年3月

古典様式のヴィシュヌ神彫刻	高田　修
盛唐彫刻以降の展開	松原三郎
弘長四年在銘の鉄造阿弥陀如来立像について	佐藤昭夫

美術研究　第258号　　昭和44年3月

若き日の岡倉天心	隈元謙次郎

山下りん筆「十二大祭図」について　岡　畏三郎
万　鉄五郎 (二) —生涯と芸術—　陰里鉄郎

美術研究　第259号　昭和44年3月

藤原定家書写長秋記の別本の断簡について　田村悦子
伝上杉謙信所用陣羽織八領—伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告　五—　神谷栄子

美術研究　第260号　昭和44年9月

平安初期における延暦寺の仏像　久野　健
足利義持所持　狐草紙絵巻をめぐって　宮　次男

美術研究　第261号　昭和44年12月

明治末大正初期の陶芸　中川千咲
断橋妙倫の墨蹟について　田村悦子
元画十八羅漢図について　戸田禎佑
李土達筆竹裡泉声図　戸田禎佑

美術研究　第262号　昭和44年12月

聖エラスムスとエラスムス像　上　坂本　満
万　鉄五郎 (三) —生涯と芸術—　陰里鉄郎

美術研究　第263号　昭和45年1月

四天王彫像—十世紀の基準作例を中心とする形制の考察—上　猪川和子
聖エラスムスとエラスムス像　下　坂本　満

美術研究　第264号　昭和45年3月

皇居杉戸絵について　関　千代
荻原守衛　(中)一　—生涯と芸術—　中村伝三郎

美術研究　第265号　昭和45年3月

天明期創製の腐蝕版画技法の原典について上　菅野　陽
四天王彫像—十世紀の基準作例を中心とする形制の考察—下　猪川和子
地蔵菩薩立像　熊谷宣夫

美術研究　第266号　昭和45年3月

永久寺真言堂障子絵色紙形より出現の鷹図について　柳沢　孝

天明期創製の腐蝕版画技法の原典について　下　　菅野　陽
荻原守衛　(中)二　―生涯と芸術―　　中村伝三郎
日吉神社の千手観音立像及び菩薩立像　　久野　健

B　日本美術年鑑

昭和11年10月創刊，毎年1冊（ただし昭和19～21年版および昭和22～26年版は各1冊）出版し，昭和44年3月までに27冊を刊行した。内容は，毎年1月から12月までのわが国美術界の活動・情勢を記録するもので，美術界年史・展覧会・物故者略歴・雑誌単行図書美術文献目録・美術関係諸施設・美術関係団体・人名簿等を収録し，所内研究員の調査，執筆による。

C　保存科学　第5号　　昭和44年3月

木製品の保存処置（第1報）
平城宮跡出土木簡等について　　岩崎　友吉・樋口　清治
法隆寺金堂焼損壁体の黒斑と黴　　江本義数
文化財撮影時の照明に対する安全についての考察　　登石　健三・石川　陸郎
知恩院経蔵内部剝落どめ処置　　茂木　曙
古文化財のX線分析法による材質測定資料〔Ⅱ〕　　江本義理
平安時代漆芸技法資料〔Ⅲ〕　　中里　寿寛・石川　陸郎・立田　三朗

保存科学　第6号　　昭和45年3月

法隆寺金堂壁画パネル試験報告　　関野　克
木製品の保存処置（第2報）
木造文化財の保存処置における充填・整形用合成樹脂について
岩崎　友吉・樋口　清治
空気湿度変化緩和材としての木材の材種による相違　　登石　健三・見城　敏子
国宝東福寺三門上層内部彩色保存処置　　茂木　曙
漆の国化と湿度の関係（研究速報）　　見城　敏子・登石　健三
栃木県大平町出土舟形棺中からの蘚類（研究速報）　　江本義数
平安時代漆芸資料Ⅳ　　中里　寿克・石川　陸郎・立田　三朗

D　その他の出版物

美術部

支那古版画図録	(美術研究資料	第1輯)	昭和 7
吉備大臣入唐絵詞	(　同	第2輯)	同　9
徽宗摹張萱搗練図	(　同	第3輯)	同　10
鳳凰堂雲中供養仏	(　同	第4輯)	同　11
桃山時代金碧障壁画	(　同	第5輯)	同　12
富貴寺壁画	(　同	第6輯)	同　13
印度及南部アジア美術資料	(　同	第7輯)	同　14
光悦色紙帖	(　同	第8輯)	同　14
菱田春草	(　同	第9輯)	同　15
能恵法師絵詞	(　同	第10輯)	同　16
宮素然筆明妃出塞図巻	(　同	第11輯)	同　16
日本美術資料		第1輯	同　13
同		第2輯	同　14
同		第3輯	同　15
同		第4輯	同　16
同		第5輯	同　17
近代日本美術資料		第1輯	同　23
同		第2輯	同　24
同		第3輯	同　26
墨跡資料集		第1輯	同　24
同		第2輯	同　24
同		第3輯	同　26
源氏物語絵巻			同　24
黒田清輝素描集			同　24
栄山寺八角堂			同　25
栄山寺八角堂の研究			同　26

法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究		昭和28
黒田清輝作品集		同　29
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで	同　16
同　　続編	昭和11年～同20年	同　23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年	同　29
美術研究索引	第1号～第100号	同　16
美術研究総目録	第1号～第230号	同　40
高雄曼荼羅		同　41
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで（再刊）	同　42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年	同　44

ほかに科学研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受け，または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編		吉川弘文館	昭和30
梁楷	美術研究所編	便利堂	同　32
醍醐寺五重塔の壁画	高田　修編	吉川弘文館	同　34
平安時代世俗画の研究	秋山光和著	同	同　39
近代日本美術の研究	隈元謙次郎著	大蔵省印刷局	同　39
黒田清輝	同	日本経済新聞社	同　41

芸能部

標準日本舞踊譜	昭和35
音盤目録　I	同　40
芸能の科学—芸能資料集1— 四世鶴屋南北作者年表	同　41
同　　—芸能資料集2— 鮫の神楽台本集成	同　41

保存科学部

重要文化財円成寺本堂内陣彩色剝落どめ

（東京国立文化財研究所受託研究報告　保存科学部　第1号）　昭和35

国宝明王院五重塔内部彩色剝落止本作業及び木材の科学的処置

	(同	第2号)	昭和36
国宝明王院五重塔四天柱塗装処置及び天井板彩色保存処置	(同	第3号)	同 36
国宝西明寺三重塔内部彩色剝落どめ	(同	第4号)	同 36
重要文化財東照宮内部彩色剝落どめ	(同	第5号)	同 36
国宝海住山寺五重塔内陣板絵及び彩色剝落どめ	(同	第6号)	同 37
重要文化財霊山寺三重塔内部彩色剝落どめ等科学処置	(同	第7号)	同 37
重要文化財万福寺木額，柱聯，榜牌等剝落どめ	(同	第8号)	同 38
重要文化財舟屋形内部彩色剝落どめ	(同	第9号)	同 38
国宝興福寺北円堂内部彩色保存処置	(同	第10号)	同 39
国宝崇福寺第一峰門彩色剝落どめ	(同	第11号)	同 39
重要文化財本地堂焼損材補修材料の研究	(同	第12号)	同 40
重要文化財崇福寺三門彩色剝落どめ	(同	第13号)	同 40
重要文化財般若寺十三重石塔初重軸石剝落止め硬化処置	(同	第14号)	同 40
重要文化財吉野水分神社本殿建築彩色剝落どめ	(同	第15号)	同 40
国宝薬師寺東塔内部彩色剝落どめ	(同	第16号)	同 41
重要文化財千代神社本殿の向拝手挾の保存修理にかかる保存処置	(同	第17号)	同 41
木造神像二軀の科学的保存処置	(同	第18号)	同 42

(2) 公開学術講座

美術部

43年12月4日　於日本経済新聞社小ホール（公開講座）

明治初期の洋画　　岡　畏三郎

明治の洋画は，江戸時代洋風画の技法，伝統がそのまま継続発展したというより，維新後，西欧の影響のもとに全く新たに発足，発展したと考え，作品のスライドを多数用いて概要をのべた。

明清の文人画　　川上　涇

明代における文人画家と職業画家との交流と対立，明末の文人画の典型化と分派，明清交代期における異色画家の輩出，清代に明瞭となった文人社会の変質と文人画家の新旧2つのタイプ等につき，国内国外の現存作品多数を映写して説述した。

44年12月3日　於日本経済新聞社小ホール（公開講座）

藤原仏画の展開　　柳沢　孝

10世紀から12世紀までの約300年間にわたる仏教絵画の主要遺品を中心として，その様式的特色と展開とに関し，スライドを用いて概要を述べた。

明治の彫塑　　中村伝三郎

江戸時代から明治が継承した伝統彫刻の復古，改新蘇生の過程をタテの系譜とし，明治9年工部美術学校が創設され，その彫刻学科に於て西洋技法（塑造）と精神との移植が行なわれてからの流れをヨコの作用とみて，この両者が如何に接触交響しあって発展してきたかの明治彫塑の史的展開について，その概要をスライド75枚を用いて説述した。

芸能部

昭和43年11月15～16日　朝日講堂

「おどりの技法」

第1日

1　舞踊譜　　横道萬里雄

舞踊譜の原理，舞楽・能・歌舞伎舞踊譜の実態，「標準舞踊譜」の組織，舞踊譜の将来について，実例を挙げつつ説いた。

2　おどりの伝承　　佐藤道子

「舞曲扇林」「風姿花伝」を例として，おどりの技法の基礎を説き，師弟三代による「助六」の実演と座談会を通して，世代・年齢等による技法の異同を説いた。

実演「助六」　　花柳昌太朗／花柳千代／花柳千和歌

第2日

1　動きの基礎　　仲井幸二郎

いわゆる「おどり」における共通した身体的動作として，まう・くるう・おどる・

ふむなどの基本的動作を抜き出し，それらが単なる日常的な動作から，ある目的をもってくり返され芸能化してくる筋道を，スライドを併映しつつ，芸能史的見地より解説した。

2　おどりと劇　　浦山政雄

おどりが歌舞伎の中に占める位置を，歴史的に概説し，戦後22年間に東京主要劇場の本興行で，3回以上上演された所作事約100種について，技法による分類を試みた。

3　舞踊公演の将来　　三隅治雄

対談　花柳寿楽

明治以来，歌舞伎界から独立した舞踊家たちは，いろいろの形の舞踊公演を開いて来たが，その多くは身内を相手のおさらい会か，研究発表会程度のもので，社会大衆との交流はなかった。今日の日本舞踊の衰退の原因が従来の公演の性格の偏向にあるとすれば，今後の公演の持ち方はどうあるべきか，その形式・演目配列・演目内容・舞踊家の心構え等について，明治以後の諸例を引用しながら意見を交換した。

昭和44年12月23日　朝日講堂

「民俗舞踊の技法」

1　民俗舞踊の庭—御所から河原まで—　　仲井幸二郎

民俗舞踊の行なわれる場所についての概観で，民俗舞踊にはそれぞれ固有の舞台があり，決まった場所で行なわれることが芸能の大事な条件なのだが，民俗舞踊の行なわれる機会が祭の庭であり，神迎えから神送りまでの神の一連の行動に今日の民俗舞踊の根源がある以上，その舞台は神祭りのそれぞれの場所であらねばならぬ。境・道中・大道・門口・庭・放出・座敷等，芸能の行なわれる場所を，上述の見解から解説した。

2　おどりの技法の流れ—念仏踊・小歌踊・盆踊—　　三隅治雄

わが国の民俗舞踊には“おどり„と名のるものが数多くある。おどりはほんらい跳躍を意味するが，この跳躍動作がどのような発展径路をたどって念仏踊・小歌踊・盆踊等等の踊の諸群を生み出していったかを，スライドや実演によって具体的に解説した。

実演　清水　和歌・小寺しのぶ

(3)　開所記念日行事

昭和43年度（美術部担当）

昭和43年10月18日～19日，東京国立文化財研究所の開所記念行事として「平安木彫展」を本研究所黒田記念室において，開催した。出陳した木彫は，重文4点，重美1点を含む18件で，個人所蔵のため一般の研究者が見ることのむつかしい木彫及び全く未発表の作品等が主であった。このため参観者は多く250人に及んだ。

昭和44年度（保存科学部担当）

昭和44年10月25日，東京国立博物館大講堂において，開所記念講演会を催した。

1.　出土品の科学的保存処置　　化学研究室長　岩崎　友吉

東京国立博物館の日本考古展―考古学，この25年の歩み―に因んで題目を選らんだ。考古学的発掘による出土品は，発掘の瞬間から環境の激変による大きな変化の過程をたどるので，崩壊を未然に防止するためには，出土品発見の時点から化学的保存処置を開始したければならない。その最も顕著を例として，保存科学部が一部受託研究で行なった栃木県大平町七回鏡塚古墳の実例を，木製品・金属製品・皮革製品について解説した。

2.　美術品撮影時の写真照明　　物理研究室長　登石　健三

文化庁は，昭和44年8月23日文化庁長官裁定で「写真撮影等に関する基準」を制定したが，撮影時の写真照明が美術品等に悪影響を生ずると認められる場合は許可にならないことを規定しているので，光源の種類を各説の上，それらの被写体に対する影響を科学的に検討の上，撮影時の注意事項を説明し，照明基準を提案した。

(4)　国際国内関係

美術部

国際関係としては美術部の出版物・研究資料など各国との交換が盛んに行なわれ，また外国の研究者で当部研究員の指導ないしは資料を利用し研究を進める者も多かった。海外における調査研究については坂本技官が42年11月よりヨーロッパに留学中で

あったが，西洋美術史及び西洋版画と日本初期洋風画との交流関係の調査研究を終え43年11月帰国し，戸田技官は43年10月米国クリーヴランド美術館における元代美術展のシンポジウムに参加し，更に米国各地の元代絵画の調査を行ない，柳沢技官は43年11月より44年1月まで欧米ならびにインド所在の日本及び敦煌請来の仏教絵画調査のため出張した。

国内における活動については前記各項に記されている如くであるが，学会関係として特に美術史学会・美学会などと接触を密にし，多くの寄与をなした。

芸能部

1　関係学会

部員は，芸能学会・芸能史研究会・中世文学会・東洋音楽学会・日本演劇学会・日本歌謡学会・日本近世文学会などに参加し，それぞれの学会に理事・委員・幹事として寄与している。

2　関係研究会

部員が個個に関係する研究会は数が多いので，全員が関係するものだけを挙げる。

〔Ⅰ〕 江戸末期以来の歌舞伎囃子付帳の分析研究を目的として，歌舞伎囃子協会・国立劇場芸能調査室・早稲田大学演劇博物館などと提携し，その他数名の学者の参加を得，昭和42年以来，隔月一回歌舞伎囃子研究会を続けている。

〔Ⅱ〕 芸能の技法の総合的組織的把握を目的とする研究会を，昭和42年度より開始したが，能楽の技法を中心とする第一期3年計画は，音楽舞踊研究室の主導により，東京芸大・早大・法大・東京女子大等の学生および卒業生十余名の参加を得て続行している。

3　万博関係

郷土芸能研究室長三隅治雄は，お祭り広場の芸能の演出企画を担当参与している。

保存科学部

1　昭和44年4月ベニスで開催されたローマセンター第5回総会に岩崎友吉化学研究室長は日本代表として出席し，理事に選挙され，日本は理事国となった。因みに日本は昭和42年12月ローマセンターに加盟した。（ローマセンターは，文化財の保存と修復の科学的研究の国際センターでローマに置かれている。）

2　昭和44年4月中華民国台湾故宮博物院の招きで，岩崎友吉化学研究室長は，同

院の保存研究室の設立に対して助言を行なったが，昭和44年10,11月の間に，同院副院長の潭氏とともに袁氏の来訪を受け，更に具体的な必要設備の資料を提供した。

3、昭和44年9月アムステルダムで開催されたローマセンター及び国際博物館会議（ICOM）の文化財の保存に関する第9回総会に招請をうけて，岩崎友吉化学研究室長は出席した。

4　昭和43年開館した東京国立博物館東洋館及び昭和44年開館した東京国立近代美術館の保存環境について文化財の保存上から，登石健三物理研究室長は専門委員として協議に参加し，特に螢光灯照明について試験を行なった。

5　昭和43年から，万国博覧会の美術館の建築計画と，竣工後の文化財の保全管理に科学的な立場から協力のため，関野克保存科学部長は委員として，登石健三物理研究室長は専門調査員として参加した。

6　昭和43年，44年の両年間に，文化庁の発掘技術者研究会に，岩崎友吉化学研究室長と樋口清治研究員，美術工芸品修理技術者後継者養成講習会に登石健三物理研究室長と樋口清治研究員，文化財管理者講習会或は管理研究協議会に登石健三物理研究室長がそれぞれ講師を委嘱された。

Ⅵ 研究施設・設備

1 蔵　　書

美術部

東洋古美術・近代日本美術・西洋美術関係を主として，和漢洋書を合わせて約17,000部，ほかに美術関係雑誌・売立目録類及び拓本がある。

芸能部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書3,029冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ（第1次）・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌，丸本・謡本等の台本も多数収集している。

保存科学部

古来の伝統的生産及び工芸技術書・技術史，または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの，修理報告書・調査報告書，及び化学・物理・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて約600冊を収集している。

昭和43・44年度（44・12まで）の新蔵書は次のとおりである。

区　分	美術部		芸能部		保存科学部		計
	和漢書	洋　書	和漢書	洋　書	和漢書	洋　書	
昭和43年度	557冊	36冊	192冊	1冊	230冊	102冊	1,118冊
昭和44年度	450	23	302	0	40	5	815
計	1,007	59	494	1	270	102	1,933

2 資　　料

美術部

主として写真による美術研究資料であるが，その収集の目的は，内外の資料をあま

ねく収集，整理，保管して，その完璧な収集箇所として美術の研究に資することである。この趣旨に基づいて設立当初から写真撮影による資料の作成をはじめ，印刷物を整理してこれに加える等その収集につとめている。資料の内容は，日本美術・東洋美術・西洋美術・および明治・大正美術に大別しさらにこれを絵画・彫刻・工芸・建築等に分類整理している。その数は特別大型のものまで万余がある。写真資料のほかに印譜・図版カード等がある。

芸能部

レコード・録音テープ・写真（35ミリ・8ミリ・16ミリシネを含む）等による芸能資料を多数そなえている。レコードには毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか，昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは，明治・大正・昭和三代にわたって刊行された各種邦楽レコードを網羅したもので，近代における邦楽の実態と変遷を知る上での貴重な資料となるものである。録音テープ及び写真は，雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので，奏演法の解析を中心とした写真・テープ，あるいは各種文書の記録写真なども含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区　　分	レコード	録音テープ		写　　真	シネ・フイルム	
		7　型	5　型		8ミリ	16ミリ
43～44年度	5,782枚	865本	262本	52,856枚	99本	3本

3　機器・設備

美術部

光学的研究設備

光学的鑑識法を東洋古美術品の研究に応用することは当研究所において既に戦前から企図されていたが，昭和27年度にはそれまでの予備的研究成果と海外における研究設備を参考とし，科学研究費（機関研究）の交付を受けて本格的な設備を整えるにいたった。その後も技術的な進歩に即応して新規の装置を加え，美術史学の実証的研究

に多大の貢献をしている。現在の主要設備を類別すると次のとおりである。

Ⅰ　X線透過撮影装置

(1)　固定式白色X線装置（100 KV）　1式

(2)　固定式単色X線装置（80 KV）　1式

（対螢光板，支持台，防X線用衝立等）

(3)　可搬式白色X線装置　1式

(4)　可搬式ソフテックス装置（J型）　1式

(5)　携帯用ソフテックス装置（E型）　1台

Ⅱ　紫外線照射装置

(1)　固定式照射装置　2台

(2)　可搬式照射装置（フイリップス紫外線ランプ125 W及び専用トランス）2台

(3)　携帯用紫外線検査器　1台

Ⅲ　ナトリウムランプ照射装置　2台

Ⅳ　赤外線暗視装置及び間接撮影装置

(1)　双眼実体顕微鏡及び写真撮影装置　1式

(2)　新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置（可動支持台及び携帯用スタンド）　1式

マイクロ写真関係設備

マイクロ方式による古文化財関係基礎資料の収集調査を目的とし，昭和36・37年度科学研究費（機関研究）により次の設備を整え，研究に活用している。

Ⅰ　マイクロ写真撮影装置　1式

（付自動現像機，プリンター，引伸機，乾燥機等）

Ⅱ　マイクロ閲読機（ルーモ社製）　3台

Ⅲ　リーダープリンター

芸能部

各種伝統芸能の記録及び分析研究のための設備・機器を所有する。昭和42年度の機関研究費によって購入したビデオテープレコーダーは，研究の対象となる各種の芸能の音と画像をテープに収録し，それを机上に備えつけたブラウン管及びスピーカーで，同時に再生する装置で，音と画像を常時必要な回数繰返し，再生の速度も普通速度の

ほかに，1/5の低速まで連続的に落せるので，採譜や測定に有利であり，16ミリ分析装置は16ミリ撮影機で記録したフィルムを分析解明する装置で，机上に備え付けたスクリーンに，1コマずつの映写ができ，1コマずつ送って行ける。また秒速5～24コマ連続に変換のできる変速映写や，逆転映写も可能である。これによって像の測定分析や舞踊譜その他の採譜記録を行なうことができる。

Ⅰ　設　備

(1)　録音室　　1室

(2)　レコード資料室　　1室

Ⅱ　機　器

(1)　ピッチレコーダー　　1台　日本電子測器K・K製

(2)　テープレコーダー　　5台（うち1台((ナグラ))昭和42年度購入）

(3)　ビデオコーダー　　1台　ソニー社（昭和42年度購入）

（附属品）

9インチテレビ　　1台

ピクチュアモニター　　1台

ビデオカメラ　　1台

48時間用タイマー　　1台

(4)　16ミリ撮影機　　1台　アリフレックス社製

(5)　〃　映写機　　1台　エルモ社製

(6)　8ミリ撮影機　　2台　ベル・ハウエル社，エルモ社製

(7)　〃　映写機　　1台　エルモ社製

(8)　35ミリ写真機　　4台

(9)　16ミリマイクフィルム分析装置　　1台　コダック社製(昭和42年度購入)

保存科学部

主な研究設備

装　置　名	型式又は性能	製造会社名
恒温恒湿槽	−30°～60°C	東洋理科工業
サンシャイン　ウェザー　メーター	WE-SUN-HC	〃

真空凍結乾燥装置		加藤万製作所
アムスラー強度試験機	500 kg	東京衡機
紙耐揉強度試験機		上島製作所
光電分光光度計	PEM—2型	日立
発光分光分析装置		(当研究所組立)
螢光X線分析装置	D—4型	理学電機
X線回折装置およびデバイーシェラーカメラ・ラウエカメラ		〃
X線発生装置(透視写真用)	ウェルテス—200	島津
〃	医療用愛国号	〃
〃	ソフテックスS-E	小泉製作所
真空蒸着装置	CU—6S	徳田製作所
金属顕微鏡	PMF	オリンパス
生物顕微鏡	LCM bi	千代田光学
〃	RI tr	〃
表面アラサ顕微鏡		ライツ
Co-60, γ線線源	3キュリー	
〃	0.2キュリー	
ガイガー・ミュラー計数装置	32型	科研
自記分光放射計	SR—1型	日本分光工業株式会社
ガスクロマトグラフ(水素イオン化検出器・熱伝導検出器・熱分解装置付)	K—53型	日立製作所
回折格子自記赤外分光光度計	IR—G型	日本分光工業
〃 赤外顕微鏡	IMP—3型	〃
引張試験機	5 kg MKS型	丸菱科学製作所
自記分光光度計	EPS-3T	日立製作所
自動記録式示差熱天秤	TGD-C4	アグネ技術センター

文化財の特殊性として，材質の劣化現象究明のための試験機類，非破壊的方法による材質調査のための分析機器類，及び微少試料の分析，調査などに用いる顕微鏡類などがある。

4 黒田記念室

この記念室は，本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するた

めに設けられたもので，その油絵・素描・画架等を陳列している。

収蔵されているものは，油絵125点・素描170点・スケッチブック等若干である。これらは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが，その後，樺山愛輔・黒田照子・田中良等からの寄贈もふくまれており，随時陳列替を行なっている。毎週木曜日午後1時から4時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは，「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」等である。

黒田子爵記念室観覧規程

第1条　本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は，この規程によって一般に公開する。

第2条　観覧は無料とする。

第3条　観覧者は，備付けの帳簿に現住所，氏名を記載し，掛員の指示を受けるものとする。

第4条　陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は，予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第5条　観覧者は，記念室内において左の事項を行ってはならない。

一　陳列品に手を触れること。

二　インク・墨汁等を使用すること。

三　飲食及び喫煙をなすこと。

第6条　観覧者がこの規程に違反し，又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは，退場を命ずることがある。

第7条　観覧の日時は毎週木曜日午後1時から同4時までとし，観覧を停止する日は左の通りとする。

祝　日

開所記念日（10月18日）

年末年始（12月25日から翌年1月6日まで）

夏期（7月21日から8月31日まで）

第8条　本研究所において必要があるときは，前条の日時を随時変更することがある。但しこの場合は予め掲示する。

5 閲　覧　室

本研究所美術部の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の閲覧者数は，延1,200名程度である。

Ⅶ 職　　員

1 現　職　員

（昭和44年4月1日現在）

（区　分）	（官　名）	（職　名）	（氏　名）	（発令年月日）
	文部技官	所　長	関野　克	40. 4. 1
庶務課	文部事務官	課　長	岩田守夫	44. 4. 1
	〃	課長補佐	音川啓太郎	41. 6. 1
	〃	専門員	藤江金治	25. 7. 17
庶務係	〃	係　長	羽田吉一	23. 3. 16
〃	〃		松本多賀子	39. 6. 16
〃	〃	警務員	友田　薫	41. 2. 1
〃	〃	用務員	高谷たま	39. 4. 1
〃	〃	作業補佐員	大塚正司	44. 1. 6
会計係	文部事務官	係　長	大釜一也	37. 1. 16
〃	〃		本村傳一	34. 4. 1
〃		事務官	角田友子	39. 7. 16
〃		事務補佐員	高橋雄二	43. 10. 30
美術部	文部技官	部　長	中川千咲	9. 4. 18
第一研究室	〃	室　長	久野　健	20. 5. 31
〃	〃		柳沢　孝	21. 9. 30
〃	〃		田村悦子	22. 6. 16
〃	〃		猪川和子	22. 6. 27
〃	〃		宮　次男	30. 9. 1
〃	〃		戸田禎佑	37. 6. 1
〃		非常勤研究員	秋山光和	42. 2. 1

(区　分)	(官　名)	(職　名)	(氏　名)	(発令年月日)
第二研究室	文部技官	室　長	岡　畏三郎	20. 5.15
〃	〃		関　千代	18.12.15
〃	〃		坂本　満	33.10. 1
〃	〃		陰里鉄郎	41. 4. 1
資料室	〃	室　長	川上　涇	21. 2.28
〃	〃		田実栄子	23. 3.31
〃	〃		永雄ミエ	23. 9. 3
〃	〃		辻　惟雄	37. 6. 1
〃	〃		江上　綏	38. 5. 1
〃	〃		関口正之	42. 2. 1
〃	〃	(写　真)	橋本弘次	21. 6.15
〃	〃	〃	市川和正	30. 7. 1
〃	〃	〃	野久保昌良	36.10. 1
美術部	文部技官	主任研究官	中村傳三郎	22.10. 1
〃	〃	〃	上野アキ	17.11. 3
芸能部	文部技官	部　長	浦山政雄	27.10. 1
演劇研究室	〃	室長事務取扱	浦山政雄	27.10. 1
〃	〃	文部技官	前嶋茂子	39. 7. 1
〃		調査研究員	宮本瑞夫	41. 5. 1
〃		事務補佐員	藤原正子	44. 4. 1
音楽舞踊研究室	文部技官	室　長	横道萬里雄	28. 3.16
〃	〃		佐藤道子	30. 5.16
〃		調査研究員	松本　雍	44. 9. 1
郷土芸能研究室	文部技官	室　長	三隅治雄	27.10. 1
〃		調査研究員	仲井幸二郎	41. 5. 1
保存科学部	文部技官	部長事務取扱	関野　克	27. 4. 1
化学研究室	〃	室　長	岩崎友吉	27.10. 1
〃	〃		樋口清治	37.11. 1

化学研究室	文部技官		門倉武夫	32. 5. 1
物理研究室	〃	室長	登石健三	27.10. 1
〃	〃		見城敏子	29. 9. 1
〃	〃		石川陸郎	32. 4.15
生物研究室	文部技官	室長事務取扱	関野　克	37.10. 1
〃		調査研究員	江本義数	33. 5. 1
修理技術研究室	文部技官	室長	立田三朗	37.10. 1
〃	〃		中里寿克	39. 1. 1
〃	〃		茂本　曙	29. 7. 1
保存科学部	文部技官	主任研究官	江本義理	27. 4. 1

2 旧　職　員（昭和25年8月～昭和44年3月）

（退職，転任時の官職）	（氏　名）	（在職期間）
美術研究所文部技官	島田修二郎	自 昭 23. 7. 1 至 昭 26.11.30
美術部第一研究室文部技官	白畑よし	自 昭 3. 8. 1 至 昭 27. 8. 1
美術部長	松本栄一	自 昭 24. 8.31 至 昭 27.10. 1
美術部第二研究室文部技官	河北倫明	自 昭 18. 1.15 至 昭 27.10.16
美術部第一研究室技術員	鈴木友也	自 昭 28. 1. 1 至 昭 28. 2. 1
庶務室　雇（事務）	山田秀昭	自 昭 25.10. 1 至 昭 28. 4.30
所長事務代理	矢代幸雄	自 昭 27. 4. 1 至 昭 28.11. 1
美術部資料室文部技官	持丸一夫	自 昭 22. 6. 1 至 昭 29. 3.18
庶務室庁務補助員	長沢アイ	自 昭 27. 5.15 至 昭 29. 5.31
保存科学部臨時筆生	赤岡恒子	自 昭 26. 4. 1 至 昭 29. 7.31
庶務室雑仕	吉野茂七	自 昭 21.11.30 至 昭 29.12.31
庶務室雑仕	諸星ハル	自 昭 20. 5.15 至 昭 29.12.31
美術部資料室技術員	山田桂二	自 昭 29. 2. 1 至 昭 30. 2.15
美術部第一研究室文部技官	大串純夫	自 昭 14. 4. 1 至 昭 30. 7.14

（退職，転任時の官職）	（氏　　名）	（在職期間）
庶務室臨時筆生	藤森園子	自 昭 29. 6. 1 至 昭 31. 11. 30
芸能部長（併任）	加藤成之	自 昭 27. 10. 1 至 昭 32. 6. 16
保存科学部庁務補助員	橋本義雄	自 昭 28. 10. 1 至 昭 32. 7. 31
美術部第二研究室技術員	池田凉子	自 昭 22. 6. 16 至 昭 33. 6. 30
美術部文部技官（併任）	新規矩男	自 昭 22. 10. 21 至 昭 34. 3. 31
美術部長	福山敏男	自 昭 23. 5. 11 至 昭 34. 4. 16
芸能部庁務補助員	新井範子	自 昭 27. 10. 21 至 昭 34. 10. 31
庶務室庶務係長	加藤輝之	自 昭 27. 10. 1 至 昭 34. 11. 16
美術部資料室文部技官	小沢健志	自 昭 26. 4. 1 至 昭 36. 3. 31
庶務課庶務係長	安岡潤	自 昭 34. 11. 16 至 昭 36. 10. 1
庶務課文部事務官	長沢朝夫	自 昭 29. 5. 16 至 昭 36. 11. 16
美術部第一研究室長	熊谷宣夫	自 昭 19. 10. 1 至 昭 37. 3. 31
美術部長	田沢坦	自 昭 34. 6. 4 至 昭 37. 4. 15
芸能部長（併任）	下総覚三	自 昭 33. 1. 16 至 昭 37. 7. 9
美術部第一研究室長	伊東卓治	自 昭 22. 5. 3 至 昭 38. 3. 31
庶務課警務員	鶴田豊次郎	自 昭 29. 4. 1 至 昭 38. 3. 31
保存科学部修理技術研究室長	毛利登	自 昭 37. 10. 1 至 昭 38. 4. 1
庶務課庶務係長	鬼山光義	自 昭 36. 10. 1 至 昭 38. 4. 1
芸能部演劇研究室事務員	玉木清子	自 昭 34. 9. 1 至 昭 39. 6. 30
庶務課事務員	長沢道子	自 昭 31. 12. 1 至 昭 39. 7. 15
所長	田中一松	自 昭 27. 10. 1 至 昭 40. 3. 31
庶務課長	小嶋忠二	自 昭 26. 5. 1 至 昭 40. 3. 31
保存科学部物理研究室研究員（非常勤）	呉屋充庸	自 昭 29. 4. 1 至 昭 40. 3. 31
美術部文部技官（併任）	米沢嘉圃	自 昭 27. 10. 1 至 昭 40. 5. 31
〃	吉川逸治	自 昭 22. 10. 1 至 昭 40. 5. 31
〃	河北倫明	自 昭 28. 4. 1 至 昭 40. 5. 31

（退職，転任時の官職）	（氏　　名）	（在職期間）
庶務課作業員	糟谷愛子	自 昭 37. 2. 1 至 昭 40. 12. 1
庶務課事務員	中村圭子	自 昭 35. 11. 15 至 昭 40. 1. 31
庶務課警務員	鎌田幸四郎	自 昭 29. 1. 1 至 昭 41. 2. 1
美術部第二研究室長	隈元謙次郎	自 昭 7. 6. 30 至 昭 41. 3. 31
芸能部演劇研究室研究員（非常勤）	戸部銀作	自 昭 27. 10. 1 至 昭 41. 3. 31
芸能部音楽舞踊研究室研究員（非常勤）	岸辺成雄	自 昭 27. 10. 1 至 昭 41. 3. 31
芸能部郷土芸能研究室研究員（非常勤）	池田弥三郎	自 昭 27. 10. 1 至 昭 41. 3. 31
芸能部演劇研究室研究員（非常勤）	石田百合子	自 昭 40. 4. 1 至 昭 41. 3. 31
庶務課課長補佐	守谷安知	自 昭 38. 4. 1 至 昭 41. 6. 1
美術部第一研究室長	秋山光和	自 昭 21. 10. 1 至 昭 42. 2. 1
庶務課文部事務官	本間春次	自 昭 40. 4. 1 至 昭 42. 3. 31
芸能部演劇研究室研究員（非常勤）	阿部順子	自 昭 40. 8. 1 至 昭 43. 9. 30
美術部長	高田修	自 昭 27. 12. 1 至 昭 44. 3. 31
庶務課長	野島弥三郎	自 昭 41. 4. 1 至 昭 44. 3. 31
芸能部研究員（非常勤）	山路興造	自 昭 42. 4. 1 至 昭 44. 3. 31
庶務課事務補佐員	横川千代子	自 昭 43. 4. 5 至 昭 44. 3. 31

Ⅷ 関 係 法 規

○文部省設置法（昭和24年法律第146号）抜すい

第3節　附属機関

（附属機関）

第36条　第四十三条に規定するもののほか，文化庁に，次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

2　前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は，文化庁長官の申出により，文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

2　国立文化財研究所の名称及び位置は，次のとおりとする。

名　　称	位　　置
東京国立文化財研究所	東　京　都
奈良国立文化財研究所	奈　良　市

3　国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

4　国立文化財研究所及びその支所の内部組織は，文部省令で定める。

○文部省設置法施行規則（昭和28年1月13日文部省令第2号
昭和44年6月15日文省部令第20号追加）抜すい

第4節　国立文化財研究所

第1款　東京国立文化財研究所

（所長）

第117条　東京国立文化財研究所に，所長を置く。

2　所長は，所務を掌理する。

（内部組織）

第118条　東京国立文化財研究所に，庶務課及び次の三部を置く。

一　美術部

二　芸能部

三　保存科学部

（庶務課の事務）

第119条　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

一　職員の人事に関する事務を処理すること。

二　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四　経費及び収入の予算，決算その他会計に関する事務を処理すること。

五　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

六　庁内の取締りに関すること。

七　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

（美術部の三室及び事務）

第120条　美術部に，第一研究室，第二研究室及び資料室を置く。

2　第一研究室においては，わが国の上代，中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なう。

3　第二研究室においては，わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

4　資料室においては，美術の研究に関する資料の作成，収集，整理，保管，公表及び閲覧並びに光学的方法による美術の研究を行なう。

（芸能部の三室及び事務）

第121条　芸能部に，演劇研究室，音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室を置く。

2　演劇研究室においては，演劇及びその保存に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

3　音楽舞踊研究室においては，音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

4　郷土芸能研究室においては，郷土芸能及びその保存に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

（保存科学部の四室及び事務）

第122条　保存科学部に，化学研究室，物理研究室，生物研究室及び修理技術研究室を置く。

2　化学研究室においては，文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

3　物理研究室においては，文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

4　生物研究室においては，文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

5　修理技術研究室においては，文化財の修理に関する科学的，技術的調査研究を行ない，及びその結果の公表を行なう。

○文部省定員規則（昭和36年6月6日文部省令第14号）抜すい

国家行政組織法（昭和23年法律第120号）第22条の2の規定に基づき，文部省定員規則を次のように定める。

文部省定員規則

文部省の各内部部局，各所轄機関（文部省設置法（昭和24年法律第146号）第14条に掲げる国立学校以外の各機関をいう。）及び各附属機関の定員は，次のとおりとする。

文化庁

区分		定員	備考
附属機関	東京国立文化財研究所	49人	

○国立博物館等の機関別の定員について

（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）抜すい

文部省定員細則（昭和44年文部省訓令第12号）第2項の規定に基づき，各国立博物館，各国立近代美術館および各国立文化財研究所の機関別の定員を次のとおり定める。

機　　関	定　　員
東京国立文化財研究所	48人

附　則

この裁定は，昭和44年4月1日から適用する。

○教育公務員特例法施行令（抄）

（昭和24年1月12日　政令第6号）

（教育公務員以外の者）

第3条の2　文部省設置法（昭和24年法律第146号）第14条及び第36条第1項に掲げる機関（日本芸術院を除く。）の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長，教授，助教授及び助手について，法第4条，第7条，第11条，第12条，第19条，第20条及び第21条中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において，これらの規定中「大学管理機関」とあるのは「任命権者」と読み替え，これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

○東京国立文化財研究所部室長会議運営規則

（昭和45年1月23日所長裁定）

第1条　東京国立文化財研究所部室長会議（以下部室長会議という）の運営については，この規則の定めるところによる。

第2条　部室長会議は，本研究所の重要事項について協議し，各部課相互の連絡をはかることを目的とする。

第3条　部室長会議は，次の各号にかかげる職員をもって組織する。

1. 所　　長

2. 各部長

3. 各室長

4. 課　長

第4条　部室長会議は所長が招集し，その議長となる。

2. 所長に事故あるときは，会議出席者の中から互選により議長を定める。

3. 所長は，必要をみとめる職員を会議に出席させることができる。

第5条　部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は，随時開催することができる。

第6条　部室長会議に関する事務は，庶務課がこれにあたる。

第7条　この規則に定めるものの他，会議の運営に関して必要な事項は，別に定める。

附　則

この規則は，昭和45年1月23日から施行する。

昭和45年3月20日　印刷
昭和45年3月25日　発行

非売品

発行者　東京国立文化財研究所
代表者　関　野　　克
東京都台東区上野公園12—53

印刷者　学術図書印刷株式会社